

『杜陵詩律五十一格』とその成書年代

——杜詩研究の起源を探る試み——

大山

潔きよ

杜甫の詩に對する研究の歴史は既に千年を越え、杜詩に關する専門著述は唐代から清代末まで、記録に遺されたもの七く八百種類、現存するものだけでも二百種餘りあるといわれる。⁽¹⁾中でも最も古い杜詩全集は王洙編纂（一〇三九）、王琪編定・刊行（二〇五九）の『杜工部集』であり（以下王洙本と略稱する）、これは全ての杜詩研究の基本資料とされている。⁽²⁾そして現存する最古の杜詩注解書が趙次公『新定杜工部古詩近體詩先後并解』（一一三一—一四七年成書）である（以下趙次公注と略稱する）。しかし、王洙、趙次公以前の杜詩研究の實態は、資料が乏しいため明らかではない。一九九九年筆者は、一三五九年に日本で出版された五山版『詩法源流』と一五五五年に朝鮮で刊行された『木天禁語』に基づく考察によって、四百年も續いた『詩法源流』僞書説を否定した。その際『詩法源流』に含まれる吳成・鄒遂・王恭の『三氏杜詩注』⁽³⁾について、この書が杜詩注解書であることを指摘し、更に朝鮮本『木天禁語』に含まれる『杜陵詩律五十一格』が『三氏杜詩注』の来源であることを論証した。⁽⁴⁾

『杜陵詩律五十一格』（以下『五十一格』と略稱する）は四十二首の杜甫七言律を對象に、五十一の格が立てられており、格に基づく注釈を中心に、僅かではあるが原詩についての説明が附されるといふ書物であり、作者は不詳である。その成書年代については、一三五九年に出版された『三氏杜詩注』に繼承されたことによつて、遅くともそれ以前と

推測されるが、更なる考証は行われていない。本論はこの書の構成や注釈の形態に基づき、その成書年代を考察するとともに、杜詩研究史における位置づけを探る試みである。

一、『五十一格』を含む刊本

『五十一格』を含む朝鮮本『木天禁語』（國會圖書館藏）は朝鮮の尹春年によって嘉靖乙卯年（一五五五）に翻刻された。范梈（范德機）の序文と尹春年の跋文がある。一冊、四卷、銅活字版、四周雙邊、大黒口、異向雙魚尾、半葉十二行、每行二十字、雙行小字注、每行二十字、二十八厘米、線裝。合計四十一葉。「養安院藏書」の印あり。

本文の内容は初めから順に『木天禁語（内篇）⁽⁵⁾』、『詩家指要』（楊成『詩法』などでは「詩家一指」と題される）、『杜陵詩律五十一格』、『附詩法源流・傳與礪述范德機先生意』から構成される。第一部分の『木天禁語（内篇）』は明代の懷悅『詩家一指』、楊成『詩法』、史潛『新編名賢詩法』、清代の何文煥『歷代詩話』、曹秋岳『學海類編』などにも收められ、范梈（范德機）が編纂者とされている。筆者はこの部分を狹義の『木天禁語』と呼び、そのほか數種の詩論を合わせて収録し、總題として『木天禁語』を掲げる朝鮮本の如きものを廣義の『木天禁語』と呼ぶ。⁽⁷⁾

廣義の『木天禁語』は朝鮮本のほか、林羅山（一五八二—一六五七）手抄本（國立公文書館、舊内閣文庫藏）、南勢歐陽閣本（天保十一年、一八四〇年、國會圖書館藏、南勢本と略稱する。）があるが、いずれも尹春年の序を附していることから、朝鮮本系統の『木天禁語』を底本とするものであると見られる。校勘の結果、林羅山本は南勢本よりも國會圖書館藏朝鮮本と一致する點が多い。南勢本は版式から字體まで朝鮮本に似ているものの、文字の異同が多いことが明らかになった。特に『五十一格』の配置が『詩家指要』の後ではなく、その前にあるという點が大きく違っており、國會圖書館藏朝鮮本とは異なるものを底本とすると思われる。

『五十一格』の全文は二〇〇一年刊張健『元代詩法校考』（前掲注3⑧）にも収録されており、「日本天保十一年翻刻

朝鮮尹春年本を底本とする」と記述があり、筆者が見た天保十一年の南勢本ではないかと推測される⁽⁸⁾。また張氏によれば、謝天瑞（一五三八〜一六〇一在世）『詩法大成』にも『五十一格』の内容が含まれるというが、筆者は未見である。本論は朝鮮本に基づき、林羅山本と南勢本を参考として考察を進める。

二、『五十一格』の構成

『五十一格』は五十一の格名と、四十二首の七言律詩を含む。まず、詩題があり、次に格名が掲げられ、格名の下（時には詩句の間）に雙行小字注が挟まれる。注には格名の説明や、原詩に對する分析等が行われているが、前述したように注解者は不明である。その構成は次のようである。（1、2…は格名の順番、①、②…は詩の順番を表す。組詩に對しては王洙本以降諸本に共通して見られる順番により、（其二）、（其二）…を付す。なお、本論は正字を用いて表すが、朝鮮本が異なる文字を用いている場合は、そのつど注記する。□で囲ったのは朝鮮本は虫損のため缺けており、林羅山本で補った文字である。）

「秋興八首」接頂格（玉露凋傷楓樹林）（其一）	1
交股格（夔府孤城落日斜）（其二）	2
織腰格（千家山郭靜朝暉）（其三）	3
續腰格（蓬萊宮闕對南山）（其五）	4
首尾互答格（瞿塘峽口曲江頭）（其六）	5
變中之變（⑤の詩に基づく） ⁽⁹⁾	6
首尾相同格（昆明池水漢時功）（其七）	7
筭蹄格（昆吾御宿自逶迤）（其八）	8
雙蹄格（聞道長安似奕碁）（其四）	9

〔諸將〕 歸題格（漢朝陵墓對南山）（其二） 10 ⑨（將は朝鮮本では將と作る。⑪⑬⑭⑮も同じ。）

〔狂夫〕 歸題變格（萬里橋西一草堂） 11 ⑩

撰題格（⑭の詩に基づく） 12

撰題格（⑪、⑬の詩に基づく） 13

〔諸將〕 歇續格（洛陽宮殿化為烽）（其三） 14 ⑪

〔送韓十四歸江東省覲〕 問答格（兵戈不見老萊衣） 15 ⑫

〔燕子來舟中〕 開合格（湖南為客動經春） 16 ⑬

〔十二月一日〕 期必格（即看燕子入山扉）（其三） 17 ⑭

〔詠懷古迹〕 抑揚格（諸葛大名垂宇宙）（其五） 18 ⑮

〔諸將〕 多少格（回首扶桑銅柱標）（其四） 19 ⑯

今昔格（錦江春色逐人來）（諸將）其五 20 ⑰

〔吹笛〕 出字應格（吹笛秋山風月清） 21 ⑱

〔江村〕 疊字格（清江一曲抱村流） 22 ⑲

〔冬至〕 雙字格（年年此日長為客） 23 ⑳

四對格（㉒の詩に基づく） 24

八實格（㉒の詩に基づく） 25

〔詠懷古迹〕 對起格（支離東北風塵際）（其一） 26 ㉑

對聯格（㉒の詩に基づく） 27

散起格（㉓の詩に基づく） 28

〔奉送蜀州柏二別駕將中丞命赴江陵起居衛尚書太夫人因示從弟行軍司馬位〕 散結格（中丞問俗畫熊羆） 29 ㉒

〔恨別〕 一意格（洛城一別四千里） 30 ㉓

〔暮登西安寺鐘樓寄裴十一〕 兩重格（暮倚高樓對雪峯） 31 ㉔

- 「詠懷古迹」節節生意格（蜀主窺吳幸三峽）（其四） 32 ②⑤
 「諸將」生下結上格（韓公本意築三城）（其二） 33 ②⑥
 「峽中覽物」興兼比格（曾為掾吏趨三輔） 34 ②⑦
 「客至」興兼賦格（舍南舍北皆春水） 35 ②⑧
 「返照」興賦兼比格（林之王宮北正黃昏） 36 ②⑨
 「宣政殿退朝晚出左掖」藏頭格（天門日射黃金榜） 37 ③⑩
 顯頭格（②④、②⑨の詩に基づく） 38
 「登高」句聯分應格（風急天高猿嘯哀） 39 ③⑪
 「詠懷古迹」中聯互鎖格（羣山萬壑赴荆門）（其三） 40 ③②
 「夜」聯珠格（露下天高秋氣清） 41 ③③
 「曲江對雨」三駢格（城上春雲覆苑牆） 42 ③④
 「小至」分字起應格（天時人事日相催） 43 ③⑤
 「贈田九判官」前三對格（崕峴使節上青霄） 44 ③⑥
 「宿府」後三對格（清秋幕府井梧寒） 45 ③⑦
 「公安送韋二少府匡贊」先事後景格（逍遙公後世多賢） 46 ③⑧
 「題張氏隱居」體用渾成格（春山無伴獨相求）（其一） 47 ③⑨
 「野望」拗句格（金華山北涪水西） 48 ④⑩
 「和裴迪登蜀州東亭送客逢早梅相憶見寄」拗字格（東閣官梅動詩興） 49 ④⑪
 「詠懷古迹」拗粘格（搖落深知宋玉悲）（其二） 50 ④②
 扇對（④②の詩に基づく）^⑩ 51

この構成から次の特徴を見ることが出来る。

1、四十二首は全て七言律詩である。唐代詩歌の最高の成果は律詩であるとされ、中でも「杜甫の七言律は天地のエネルギーを含み、古今の詩の正と變を包容する」⁽¹¹⁾、「藝術形式の運用において、杜詩の獨創性が最も明らかに見えるのは律詩であり、特に七言律である」と評される⁽¹²⁾。また七律の割合に關しては、杜詩全體一四二三首、うち古體四一五首、近體一〇〇八首、七言律が一五二首といわれる⁽¹³⁾。この數字によれば、『五十一格』は杜詩全體の3%しか収めていないが、七言律の四分の一を収めることになる。更に、「秋興八首」、「諸將」五首、「詠懷古跡」五首を初め、「狂夫」「江村」「恨別」「野望」「宿府」「十二月一日(其三)」「峽中覽物」「吹笛」「返照」「夜」等、歷代の詩論家によって高く評價された作品が大半を占めている。

2、四十二首の中で蜀中の作は三十六首(86%)、なかでも夔州での作が二十六首(62%)を占めている。(その他、残りは夔州以後二首、成都以前四首である。)夔州詩について、黃庭堅(二〇四五―一一〇五)は「杜子美が夔州に來た後の古詩、律詩をじっくり讀みさえすれば、句法の要領を得ることができ、本當の巧みが生まれる」と述べ⁽¹⁴⁾、以來、杜甫の夔州詩はとりわけ高く評價されてきた。數字から見れば、夔州での二年間、杜甫は近體詩三三九首、七言律五四首を書いたといわれる(前掲注13、屈守元著による)。よって『五十一格』は夔州詩七言律全體の約半數を収めることになる。

3、七律組詩「秋興八首」、「詠懷古跡」五首、「諸將」五首が含まれる。しばしば組詩という形態をとることはすでに明末の胡震亨、仇兆鰲によって、杜甫七律の一つの特徴であると指摘され⁽¹⁵⁾、今日では「秋興八首」、「詠懷古跡五首」、「諸將五首」は、七言律詩發展史上の「紀程碑(歴史の發展の節目とされる大事件)」、「創舉(初めての試み)」であり、⁽¹⁶⁾「實爲杜甫七律的最傑出代表作(實に杜甫七律の最も傑出した代表作である)」といわれている⁽¹⁷⁾。

以上のように七言律、夔州詩、七律組詩の名篇という特徴から、『五十一格』に含まれる詩數は少ないものの、黃庭堅以來高く評價され、杜詩の最高峰と稱された詩作を數多く収めていることができる。但し組詩はバラバラ

に配置されていたり、配列の順序が一般の杜詩全集とは異なっていたりする。この問題は第四章で改めて検討する。

三、詩格と格

三―一、唐五代の詩格

『五十一格』は五十一の格を中心に構成されているが、そもそも「格」とは何であろうか。唐五代の頃の詩を論じた書物には「く詩格」と名付けられるものが多い。⁽¹⁸⁾その形式における特徴は、幾つかの題目が立てられ、その下に更に下位題目があり、下位題目のもとに様々な詩人の詩句——普通は二く四句か一・二聯——が掲げられ、時には説明が加えられるというものである。王昌齡の『詩格』を例にとれば、先ず全體が以下の題目によって構成される。

調聲、十七勢、六義、論文意、詩有三境、詩有三思、詩有三不、起首入興體十四、常用體十四、落句體七、詩有三宗旨、詩有五趣向、詩有語勢三、勢對例五、詩有六式、詩有六貴例、詩有五用例、詩有六病例、句有三例、詩有二格、犯病八格、詩有九格、詩有三得、詩有六義。⁽¹⁹⁾

この二十四項目のうち八番目の「起首入興體十四」を見てみると、

一曰感時入興。二曰引古入興。三曰犯勢入興。四曰先衣帶、後敘事入興。五曰先敘事、後衣帶入興。六曰敘事入興。七曰直入比興。八曰直入興。九曰託興入興。十曰把情入興。十一曰把聲入興。十二曰景物入興。十三曰景物兼意入興。十四曰怨調入興。

このように十四の下位題目によって構成され、このうち初めの「感時入興」には、次のような内容がある。

感時入興一。古詩「凜凜歲云暮、蟬蛩多鳴悲。涼風率以厲、遊子寒無衣。」江文通詩「西北秋風起、楚客心悠哉。日暮碧雲合、佳人殊未來。」⁽²⁰⁾此皆三句感時、一句敘事。(一、時に感じ興により(詩に)入る。古詩「凜凜として歳云に暮れ、蟬蛩多く鳴き悲しむ。涼風率として以て厲しく、遊子寒くして衣無し。」江文通の詩「西北より秋

風起こり、楚客は心悠たる哉。日暮 碧雲合し、佳人 殊に未だ來たらず。」これらは皆三句が時に感じ、一句が敘事す。）」

「格」は法式・類型などを意味し、詩格書の多くは音韻・對偶・比興・起結・病犯などを對象に、詩の作法、法則を究明しようとする。詩格の風潮は初唐に始まり、晚唐五代はその最盛期である。宋代以後は詩話の要素をまじえて「詩法」と呼ばれ、元・明期には盛んに詩法書が出版されたが、清朝になると「死法」「俗書」「陋書」と厳しく批判され、それ以後、殆ど言及されなくなったといわれている。⁽²¹⁾

三―二、『五十一格』の詩格的特徴

五十一の格を内容別に分類すると、大きく次のように分けることができる。一、句法。接項格・交股格・織腰格・續腰格・首尾互答格・變中之變・首尾相同格・筆蹄格・雙蹄格（1、2、3、4、5、6、7、8、9）。二、字法。出字應格・疊字格・雙字格（21、22、23）。三、賦比興。興兼比格・興兼賦格・興賦兼比格（34、35、36）。四、對偶。前三對格・後三對格（44、45）。五、拗體。拗句格・拗字格・拗粘格（48、49、50）。六、題目。歸題格・歸題變格・撰題格・撰題格（10、11、12、13）。七、景事。先事後景格・體用混成格（46、47）。八、一篇の構成法。歇續格・問答格・開合格・期必格・抑揚格・多少格・今昔格・一意格・兩重格（14、15、16、17、18、19、20、30、31）。九、起承轉結。對起格・對聯格・散起格・散結格・聯珠格・三駢格（26、27、28、29、41、42）。次に本文を引きながら『五十一格』の特徴を考えてみたい。

1、詩格書である。『杜陵詩律五十一格』という題名は勿論、格によって體系が構築され、句法・賦比興・對偶・篇法など詩の作法や法則を問題とするが、詩の意味内容にはあまり觸れていない點から、詩格書としての特徴が明らかである。『五十一格』の格名の多くはその出典が明らかではないが、その51番と同じ「扇對」は梅堯臣（一〇〇〇）

一〇六〇)『續金鍼詩格』に見られ、北宋以後多くの詩論書に引用されている。⁽²²⁾ところが、兩者の意味内容は異なっている。『續金鍼詩格』の「扇對」は律詩の「第一與第三句對、第二與第四對」(第一句が第三句と對をなし、第二句が第四句と對をなす)。(前掲注22の『漁隱叢話』による)であるが、『五十一格』の「扇對」は、一聯の二句の中に、それぞれ對照的な二字が含まれるというものであり(前掲注10参照)、このような説明は他の詩論書に例を見ない。よって、『續金鍼詩格』「扇對」の影響を受けていないことが推測される。

2、詩格書としては、杜甫の七言律全首採録、という選詩法が異例である。今日見られる唐五代の詩格書では、模範例として様々な詩が挙げられるが、先に見た王昌齡『詩格』の例のように、複数の詩人の、様々な詩から、二、四句または一、二聯を取り出すのが一般的である。詩體は古體・近體が混在しているが、七言律は少なく、杜甫の詩例は稀である。『全唐五代詩格校考』(前掲注18)に收録される詩格書を調べた結果、杜詩は5例しか發見できなかった。『五十一格』のように杜甫一人の七言律にのみ限定し、しかも全詩を採録するものは唐五代の詩格書には例を見ない。

3、拗體の提起。唐代の詩格書では律詩の破格が病犯として捉えられていたが、五代宋初の王叡『炙轂子詩格』では、「背律體」という語で破格が取り上げられ、一つの手本とされている。⁽²³⁾しかし、後世律詩の破格に對して用いられる「拗」という語は見られない。『五十一格』では拗句格・拗字格・拗粘格(48、49、50)のように「拗」という語を明確に用い、破格を一つの價值として提起した點が注目される。拗句格は次の通りである。

○『野望』拗句格48④ 此格拗在句上、後格拗句在下。(此の格では平仄に反するところは句の上四字にあり、後の「拗字格」では句の下三字にて反する。)

金華山北涪水西 華字當仄而拗作平、北字當平而拗作仄。(「華」の字は仄であるべきが拗して平に作り、「北」の字は平であるべきが拗して仄に作る。)

仲冬風日始淒淒

山連越嶠蟠三蜀

水散巴渝下五溪

獨鶴不知何事舞

飢鳥似欲向人啼

射洪春酒寒仍（一作因）綠

目極傷神誰爲携

金華山の北 涪水の西

仲冬 風日 始めて凄凄たり

山は越嶠に連なりて三蜀に蟠り

水は巴渝に散じて五溪に下る

獨鶴知らず 何事あつてか舞う

飢鳥 人に向かつて啼かんと欲するに似たり

射洪の春酒 寒きも仍緑なり

目極まりて神を傷ましむ 誰か爲に携えん

ここでは第一聯の上句が律詩の平仄に反している點が、詩の一つの技法として指摘されている。このような拗体・失粘に對する言及は北宋以後の詩論に多く見られるものである。⁽²⁴⁾

4、起承轉結的な視座。まず聯珠格の全文を示そう。

○『夜』聯珠格41⁽²³⁾ 雙起、雙乘、雙轉、雙結。句意分貫、故曰聯珠。（雙びて起し、雙びて乗じ（承け）、雙びて轉じ、雙びて結ぶ。句意

は各自分かれて繋がる。故に聯珠と呼ぶ。）

露下天高秋氣清 此句貫第三第五第七句。（此句は第三第五第七句を貫く。）

空山獨夜旅魂驚 此句貫第四第六第八句。（此句は第四第六第八句を貫く。）

疎燈自照孤帆宿

新月猶懸雙杵鳴

南菊再逢人臥病

前輩謂新月猶懸、南菊再逢爲四字句。雙杵應人臥病、爲三字句。蓋四字三字、上下意不相關、兩句合作一句、工部多

用此法。(先學が言うには「新月猶懸」「南菊再逢」は四字句、「雙杵(鳴)」は「人臥病」に應じ、三字句である。四字と三字、上下の意が關わりをもたないが、兩句を合わせて一句と成す。杜工部は此の方法を多く用いる。⁽²⁶⁾)

北書不至鴈無情

步蟾倚杖看牛斗

銀漢遙遙接鳳城

露下り天高くして秋氣清し

空山 獨夜 旅魂驚く

疎燈 自ずから照らして孤帆宿し

新月 猶お懸りて 雙杵鳴る

南菊に再び逢いて 人は病に臥し

北書は至らず 鴈は情無し

步蟾 杖に倚りて牛斗を看れば

銀漢 遙遙として 鳳城に接するなるべし

右の注によれば、一句の意が三・五・七句を貫き、二句の意が四・六・八句を貫くというのが「聯珠格」の意味するところである。注目されるのは、四つの聯の働きに對し、起承轉結に近い「起」「乘」「轉」「結」という語が用いられ、各聯の二句いずれにも、起或いは承・轉・結という働きが備わり、一・三・五・七句、二・四・六・八句それぞれで、起承轉結という關係が生じていると分析されている。ほかに、前述したように對起格・對聯格・散起格・散結格・三駢格(26、27、28、29、42)などに起承轉結的な視點があり、『五十一格』の大きな特徴の一つである。

起承轉結の論として最も有名なのは、元代の楊仲弘『詩法家數』にある「律詩要法：起・承・轉・合」である。この題目の下に「破題」「領聯」「頸聯」「結句」の小題目があり、たとえば「破題」の下には「或對景興起、或比起、或引事起、或就題起。要突兀高遠、如狂風捲浪、勢欲滔天。(或いは景に對して興をもつて起し、或いは比をもつて起

こし、或いは事を引いて起こし、或いは題に密着して起こす。突兀・高遠、狂風が浪を捲き、その勢は天にみなぎるが如くにすべきである。」（楊成『詩法』卷之三、嘉靖庚戌年（一五五〇）刊本）のように、具體的作法を述べた後、比喩的な表現で要點を語る。ほかの「領聯」「頸聯」「結句」も同じパターンで解説される。

上記のうち比喩的表現の部分は、白居易の詩格書を繼承したものであることが、張伯偉によって指摘されている。⁽²⁷⁾ 白居易『金鍼詩格』には「破題」「領聯」「警聯（撼聯）」「落句」という題目があり、「破題」の下には「第一聯謂之破題、欲如狂風捲浪、勢欲滔天（第一聯は破題と言う。狂風が浪を捲き、その勢、天にみなぎるが如きを欲す）」という文章が見える。ゆえに楊氏の「律詩要法」は、『金鍼詩格』を踏まえ、「起・承・轉・合」という概念を加えたものといえる。それではこの概念はどこから來たのだろうか。

今日、詩論としての起承轉結の起源は楊仲弘にあるという説が定論とされている。更に最近根據は示されていないものの、元代の「起承轉合」は宋代の經義（科擧の一科目）に由來するという新説が出されている。⁽²⁸⁾ しかし、楊仲弘は「三氏杜詩注」を繼承し、「三氏杜詩注」は『五十一格』を繼承した、という歴史過程がすでに明らかにされた以上、⁽²⁹⁾ 『五十一格』の根源的存在が無視できない。「三氏杜詩注」起承轉結論の検討は別の機會に譲るが、楊仲弘の起承轉合論はその起源を二書のような杜詩研究に求めることができるのではないだろうか。

5、一首全體に對する視座。『五十一格』には、聯單位に限定されることなく、詩全體に渡って對偶・字法・賦比興などを分析する例が多く見られる。

○『秋興八首』（其二）接項格1① 第三第四緊接第二句。（第三、四句（項）は第二句（首）と緊密に接する。）

玉露凋傷楓樹林 起興於秋而生七句。（秋に於いて興を起こし、以下の七句を生ず。）

巫山巫峽氣蕭森 上四字承楓樹、下三字承玉露凋傷。（上四字は「楓樹」を承け、下三字は「玉露凋傷」を承ける。）

江間波浪兼天湧 上四字承巫峽、下三字承氣蕭森。(上四字「巫峽」を承け、下三字「氣蕭森」を承ける。)

塞上風雲接地陰 上四字承巫山、下三字承氣蕭森、此聯共承第二句、如首項之相接。(上四字「巫山」を承け、下三字「氣蕭森」を承

る。此の聯共に第二句を承け、首(かしら)と項(くび)が相接するようである。)

叢菊兩開他日淚

孤舟一繫故園心

寒衣處處催刀尺 此句復應第三聯而生下句。(此の句再び第三聯に應じて下句を生ず。)

白帝城高急暮砧

玉露凋傷す 楓樹の林 巫山巫峽 氣蕭森たり

江間の波浪 天を兼ねて湧き 塞上の風雲 地に接して陰る

叢菊 兩たび開く 他日の淚 孤舟 一たび繫ぐ 故園の心

寒衣 處處 刀尺を催し 白帝城 高くして暮砧急なり

注釋によれば「接項格」とは、三・四句(項)が合わせて第二句(首)を受けていることを意味している。

○『曲江對雨』三駢格42③4 駢、竝也、雙也。謂雙起、雙應、雙貼。(竝は朝鮮本では並と作る。下同。)(駢は竝であり雙である。雙びて

起し、雙びて應じ、雙びて補う(句や聯を隔てて應じる)ことを謂う。)

城上春雲覆苑牆

江亭晚色靜年芳 竝起、如網舉網。(竝びて起こす。網が網を擧げる如し。)(筆者注：一・二句が共にこの詩の要點であることを言う。)

林花著雨臙脂落

水荇牽風翠帶長 花應苑牆、荇應江亭。「花」は「苑牆」に應じ、「荇」は「江亭」に應じる。)

龍武新軍深駐輦

芙蓉別殿謾焚香

上句貼苑牆、下句貼江亭。(上句は〔第二聯を隔てて〕「苑牆」に應じ、下句は〔第二聯を隔てて〕「江亭」に應じる。)

何時詔此金錢會

暫醉佳人錦瑟傍

城上の春雲 苑牆を覆い

江亭 晩色 年芳 靜かなり

林花 雨を著けて 臘脂落ち

水荇 風に牽かれて 翠帶長し

龍武の新軍 深く輦を駐め

芙蓉の別殿 謾に香を焚く

何の時から詔して此の金錢の會ありて

暫く醉わん 佳人錦瑟の傍

注釋は先ず一・二句が並び起こり、三・四句がそれぞれ一・二句に應じ、五・六句もそれぞれ一・二句と離れていながら、密切に應じると述べている。三つの對句がそれぞれ呼應し合っていることから「三駢格」という。

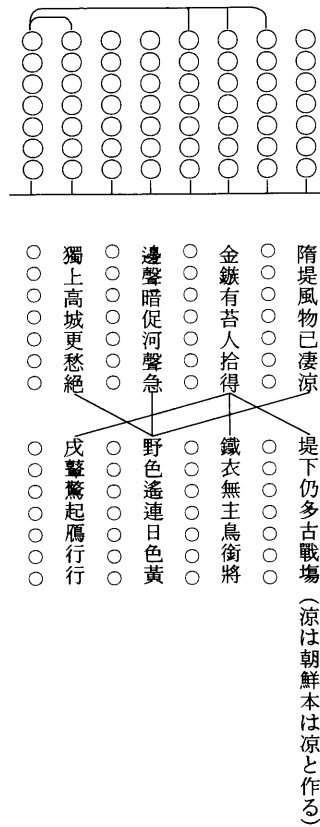
前述したように、唐五代の詩格書では、二・四句または一・二聯を取り出して、その作法を解説するのが一般的であった。このような一首全體に對する言及はいつ頃から生じたのだろうか。舊題白居易『文苑詩格』の「聯環文藻」には、「此第四句解第二句、第三句解第二句。(これは第四句が第一句を、第三句が第二句を説明するものである。)(³⁰)」のような議論が見られるが、唐五代の詩格書の中ではごく稀な例である。一方、魏慶之『詩人玉屑』(卷二)には「詩體下」という題目の下に「蜂腰體」「偷春體」「七言變體」「拗句」「扇對法」などの小題目があり、それぞれ詩全體を對象とする詩格論が展開されている。たとえば、「蜂腰體：領聯亦無對偶、然是十字敍一事、而意貫上二句、及頸聯方對偶分明、謂之蜂腰格。言若已斷、而復續也。(蜂腰體：領聯にも對偶がないが、この十字が一事を敍べ、詩意は上の二句を貫く。頸聯に至って初めて對偶が明らかになり、これを蜂腰格と謂う。言は斷たれたようだが、復び續く。)(³¹)」とある。『詩人玉屑』という書物について『四庫全書總目提要』は、南宋人の語を比較的多く記録していると述べている。⁽³²⁾では、南宋以前には同じような例はないだろうか。

『木天禁語』（内篇）には「六關（六つの要點）」という題目があり、その小題目の一つ「篇法」に、次のような范德機の解題がある。「律詩篇法、唐人李淑（淑は朝鮮本・林羅山本・南勢本では皆泐と作る）有『詩苑』一書、今世罕傳。所述篇法止有六格、不能盡律詩之變。然今廣爲十三格、完全無遺。（律詩の篇法に關しては、唐人李淑の『詩苑』があるが、今日稀にしか傳わらない。記述している篇法は六格しかないため、律詩の變化を盡くすことはできない。今これを十三格に擴充したので、完璧であり遺漏はない。）」「唐人李淑有『詩苑』という説は元明に流行したが、清以後批判され、今日では李淑は北宋の人と確定し、正しい書名は『詩苑類格』であつたことが判明している。⁽³³⁾『詩苑類格』について王應麟（一二二三～一二九六）『玉海』は次のように述べている。「二年、翰林學士李淑承詔編爲三卷。上卷首以眞宗御製八篇條解聲律爲常格、別二篇變格。又以沈約而下二十二評詩者次之。中卷敍古詩・雜體三十門。下卷敍古人體制、別有六十七門。（寶元二年（一〇三九）翰林學士李淑は詔を承けて三卷を編んだ。上卷は先ず眞宗皇帝（九三八～一〇二二）自らが、音韻・格律について詳細に分析した八篇を常格とし、別の二篇を變格として收録する。沈約をはじめとする二十二人の詩評はその後に續く。中卷は古詩・雜體を敍述したもので合わせて三十門。下卷は古人の體裁・風格を敍述し、別に六十七門を收める。）」⁽³⁴⁾

『詩苑類格』はすでに散逸したため、その全貌を正確に知ること⁽³⁵⁾は難しいが、范德機が擴充した十三格を通して篇法の概容を考えてみたい。范氏の「六關・篇法」によれば、十三格は「二字血脉、二字貫串、三字棟梁、數字連序、鉤鎖連環、雙拋、單拋、內剝、外剝、中斷、前散、後散」と題されるが、李淑のものと范氏のものとは區別されていない。釋文はないものの、格名のもとに次のような圖式と七言律詩が掲げられている。⁽³⁶⁾（□を付した箇所は損傷しているため林羅山本に基づいて補った。）

雙拋 『汴門用兵後』

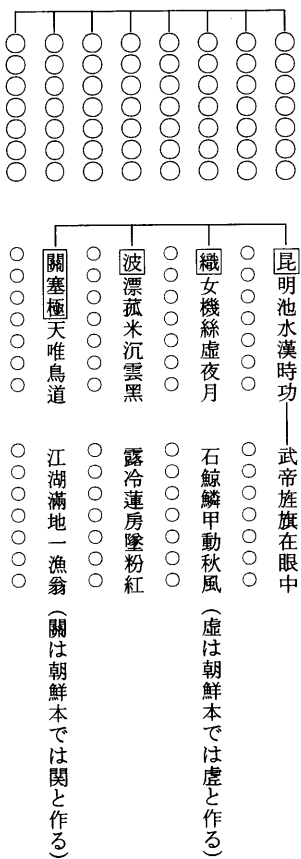
吳融



單拋

『秋興』(其七)

杜少陵



文字による説明はないが、圖式からある特徴がはっきりと見て取れる。それは七言律詩全體を對象に、句と句、句と聯、聯と聯などの關係を考察しようとしていることである。張健は『元代詩法校考』(前掲注3⑧)に『木天禁語』

「六關・篇法」を収録し、梁橋『氷川詩式』、王昌會『詩話類編』など明人の書を引いて解説を付している。⁽³⁷⁾「單拋格」についての『氷川詩式』の記述は次の通りである。「單拋者、首聯二句、上句起下句、單意說下。領聯頸聯、或事或景、皆應首句意。末聯一順說、亦要應首句。（單拋とは首聯二句において、上句が下句を起こし、一つの意を述べ以下に続く。領聯頸聯は、或は紋事或は紋景、皆首句の意に應じる。末聯は引き續き同様の意を述べ、これも首句に應じるを要す。）」詩例は范氏が舉げたもののほか、杜甫の五言『秦州雜詩』其五が加わえられている。また「雙拋格」については「雙拋者、首聯二句兩事並行、叫起中二聯。中二聯句句各應上兩事、或分應。末聯總結。（雙拋とは首聯の二句は兩事を述べて並行し、中間の二聯を呼び起こす。中間の二聯は、句ごとにそれぞれ上の兩事に應じ、或は分かれて應じる。末聯は總結する。）」とあり、詩例は范氏が舉げたもののほか、杜甫の五言『陪鄭廣文遊何將軍山林』が加わる。また、上述した「兩事」について、王昌會『詩話類編』卷一は、同じく『汴門用兵後』について、「謂上句言風物、下句言古戰場、以兩事叫起是矣。而謂領聯應戰場、頸聯應風物、則與續腰格同耳。（首聯の上句が風物、下句が古戰場を述べ、兩事を以て起こすとはこのことである。領聯が戰場、頸聯が風物に應じるのは、續腰格と同じである）」と述べている。これらの文章と合わせれば、范德機の少なくとも下側の圖は理解できるのではないだろうか。先に挙げた『五十一格』の「接項格」「三駢格」でも、一篇のどの部分が他のどの部分を「承」「應」「貼」するという議論が盛んに行われていた。范氏が李著の原意を忠實に傳えたかどうかは明らかではないが、范氏は自ら『詩苑類格』の六格を繼承しようとする志を持ち、その研究を行ったという点から考えれば、兩者は全く異なるものとは考え難い。前述したように『五十一格』は、杜甫の七律のみ、しかも全詩を採録することから唐五代の詩格書とは大きく異なっている。さらに一首全體の句と句、聯と聯との關係を論じることから考えれば、その著作年代は『詩苑類格』（一〇三九）とそう遠くない時代ではないかと推定したい。

四、全體の順序と連章組詩の分離

『五十一格』における詩の順序は「出字應格」「疊字格」「雙字格」(21、22、23)；「興兼比格」「興兼賦格」「興賦兼比格」(34、35、36)；「拗句格」「拗字格」「拗粘格」(48、49、50)のように、格の相關性によって決められているものが多い。その中で注目されるのは、最古の編年分體杜詩全集、王洙の『杜工部集』(二〇三九年編纂、一〇五九年刊行)以來、連章組詩として收録されている「諸將五首」と「詠懷古跡五首」が、それぞれ組詩の中の順番を意味する其一、其二等の番號を付されず、⑨⑩⑪⑫⑬と⑭⑮⑯⑰⑱に(數字は『五十一格』における順番を示し、王洙本に倣って配列する)、バラバラに配置されていることである。組詩から一首か數首を選んだり、門類別のため二部分に分かれ、異なる門類に配屬される例はあるが、一卷の中に全て收録していながら、番號は無く、バラバラに配置されている例は他に見えない。

『五十一格』でも「秋興八首」は組詩として冒頭におかれるが、ここでも接項格①交股格②、纖腰格③續腰格④、首尾互答格⑤首尾相同格⑥、筆蹄格⑦雙蹄格⑧のように、二つの格が一組で制作法に關する特徴を解説しており、詩格的な配慮が明らかである。更に注目すべき點は、王洙本では其四の「聞道長安似突碁」が八番目に置かれていることである。王洙本「秋興八首」の順序については、古くから合理的で動かせないものであるという評價があり、それは今日でも變わらない。例えば清金聖嘆『唱經堂杜詩解』には「倒置一首不得、増減一首不得固已(一首たりとも倒置することはできず、増減することもできない)」とあり、葉嘉瑩は「四章『聞道長安』爲正式轉入長安之始、承以上三章、啓以下四章(第四章の『聞道長安』は正式に長安のことを詠う最初のものであり、上の三章を承け、以下四章を開く)」と述べている。⁽⁴⁰⁾『五十一格』には組詩という觀點からの注釋は全くなく、前三章と後四章の轉換點とされる其四が、最後に置かれているのである。このような特殊な配列をとる一方、「秋興八首」という題目が立てられて

いることから、この八首がすでに組詩として形成されていることは明らかである。またその順序はかなり王洙本に近いことから、兩書の來源に何らかの共通点があるのではないかと思われる。

以上『五十一格』においては格の相關性が優先されること、組詩の分離、「秋興八首」の特殊な配列から、王洙本系統の影響を受けていないことが窺える。⁽⁴¹⁾「三氏杜詩注」は『五十一格』とほぼ共通する四十三首〔閨夜〕が増加されるの杜甫七言律を収録し、格名も概ね『五十一格』に一致するが、異なる點も顯著である。それは格名の數が三十七（格名が付かない場合もある）と少なく、格の相關性による配列が殆ど見られなくなり、連章組詩の分離現象が大部分消え、『秋興八首』と『諸將五首』は王洙本と同じ順序で配列されていることである。しかし、それでも『詠懷古跡』五首においては王洙本と異なり、王洙本の『詠懷古跡』其三（「群山萬壑赴荆門」⁽²⁰⁾）が他の四首と離れており、⁽²¹⁾⁽²⁴⁾⁽²⁵⁾⁽²⁶⁾⁽²⁷⁾（數字は「三氏杜詩注」における掲載の順序を示す）という順番で配置され、「詠懷古跡一／四」型を呈している。

この問題に關連して、朱鶴齡（一六〇六～一六八三）の『杜工部詩集』に興味深い注記が見られる。⁽⁴²⁾それは「吳若本作詠懷一章、古跡四首（吳若本は『詠懷一章』と『古跡四首』と作る）」という注である。⁽⁴³⁾錢謙益（一五八二～一六六四）箋注『杜工部集注』⁽⁴⁴⁾に付された吳若「杜工部集後記」によれば、吳若本とは紹興三年（一一三三）に刊行された杜詩全集であり、錢謙益に「最爲近古」（錢氏箋注にある「注杜詩略例」より）と稱賛され、その箋注の底本になっている。一方、朱鶴齡は自分の杜注を完成させる過程において、錢謙益が所有する吳若本を書き寫し、詳細に參證したと述べている（朱鶴齡「杜詩輯注序」參照）。それでは「三氏杜詩注」の「詠懷古跡一／四」型はすなわち朱氏注記の原型であろうか。確かに「一／四」という分け方においては一致するが、不一致も存在する。第二、「三氏杜詩注」では五首の詩題は全て「詠懷古跡」であるのに對して、朱氏の注記は「詠懷一章、古跡四首」とされている。第二、「一／四」の「一」に當たるものは、浦起龍は其一（「支離東北風塵際」）と見なしているが、⁽⁴⁵⁾「三氏杜詩注」では其三（「群

山萬壑赴荊門」）である。

『詠懷古跡』五首の部分を含め、今日吳若本の大部分は散逸したため（前掲注38参照）、その本来の姿を直接知ることは出来ない。この意味では「三氏杜詩注」に現存する「詠懷古跡一／四」型、更に『五十一格』の完全分離型の発見は重要な意味を持っている。それは「二／四」型が杜詩流傳の過程に存在することが證明されるだけでなく、完全分離↓部分結合↓連章組詩という歴史的發展過程が推定できることである。兩書の注解内容は他の杜詩注と比べて確かに幼稚な點があり、現に「三氏杜詩注」は明末から「醉人夢囈（酔っぱらいの寢言）」「膚淺寡識（皮相寡識）」との批判を浴びてきた。（前掲注4小論A一〇八頁、或いはB二二八頁参照）しかし、それはその時代ならではの見解であり、その時代の杜詩研究を知る貴重な資料と見るべきものであろう。たとえば、「三氏杜詩注」では分離された『詠懷古跡』（其三）（群山萬壑赴荊門）に、「此詩專言明妃（この詩は専ら王昭君を言う）」という吳成の注が付されている。これは本詩の特徴を強調するものであり、「二／四」型の形成を究明する重要な手掛かりになるだろう。また、「三氏杜詩注」の『秋興』八首に、『秋興』一題、分作前三章與後五章。以夔州長安自是二事、此其綱也。八章之分、則又各命一題。以起興觀諸興聯、可見矣、此其目也。『秋興』の一題は、前三章と後五章に分かれる。夔州と長安は自ら二つの事で、それぞれ大綱である。八章に分かれているのは、それぞれ一つのテーマがあるためである。興を起すという角度から各首の第一聯を見れば明らかである。この部分は各首のテーマを明示した箇所である。」という王恭による題解がある。これは各詩の相互關係、その順番の意味に關する議論であり、明確な章法論である。このような議論は明人より少なくとも二百年は早い。⁽⁴⁶⁾

「三氏杜詩注」において『秋興』八首、『諸將五首』、『詠懷古跡四首』が組詩として形成されていること、その順番は王洙本に近いことから、それは『五十一格』を繼承する一方、編年意識と組詩觀において大きく發展し、編年體杜詩集から影響を受けていることが推測される。しかし、「詠懷古跡一／四」型をもっている以上、やはりこの書も王

洙本に基づくものとは斷言できないだろう。前述したように、今日では王洙杜詩集は全ての杜詩研究の源であると認識されている。しかし、『五十一格』と『三氏杜詩注』の存在は、王洙本系統とは異なる杜詩集及びそれに基づく杜詩研究の存在を明らかに語っているのである。

五、繼承された形跡：二次的な注釋

『五十一格』には二次的な注、つまり注釋に對する注釋の存在が確認できる。

筆蹄格（8）筆爲車輔、猶髀從輔髀。中聯對時如蹄、首尾但筆之而不對。○筆髀同、比股也。髀音寬、兩股間也。（筆は車のそえぎであり、その意は髀が髀に従いつつこれを助けるのと同じである。中聯は蹄のように對峙し、首聯と尾聯はこれを筆（のように補助）するが對をなさない。○筆と髀は同じ、比に股である。髀の音は寬、兩股の間である。）

この注の中に○があり、○以下は○より上の部分にある筆・髀・髀に對する義注と音注であると見られる。これに關連して、『廣韻・韻上平・二十六桓』には「○寬・愛也、裕也、緩也。苦官切二。髀：髀、兩股間也。」という記述が見える。ここで、「髀」は小韻である「○寬」の同音字であるので、その音は「寬」であり、意味は「兩股の間」と解釋されている。上述した○以下の補注内容とほぼ一致し、一方他の辭書には類似する記述が見られないことから、補注は『廣韻』（二〇〇八）以後に追加されたものであらうと推測される。

『五十一格』には○の付いた注はもう一箇所あり、「奉送蜀州柏二別駕將中丞命赴江陵起居衛尚書太夫人因示從弟行軍司馬位」散結格29②の第六句の注にある。

白帝雲偷碧海春 夔州。○凡律體以虛字散句起者、次聯必用實事景物承接、三聯乃以虛字活句轉應。此篇次聯使用活句虛字、而三聯乃貼以景物實對者、蓋（朝鮮では蓋と作る）因首聯用實字故也。諸格本因虛實動靜之法錯綜得圖 非謂強局此格而後成章也。（夔州（のこ）をいう。○凡そ律詩は虛字（副詞、助詞、接續詞）や散句（押韻しない或いは對偶にならない句）をもって起こす場合、次聯は必ず

實事景物をもって承接し、三聯は虚字や活句（含蓄があり生き生きとした語句）をもって轉應する。しかし、この篇は次聯で既に活句・虚字が用いられ、逆に三聯では景物と實對をもって（第二聯を隔てて第一聯に）應じる。これは首聯で實字が用いられた故である。諸格は本來、虚實動靜の法に因づき、錯綜して名を得たのであり、詩人が強いて一定の格を決め、後に詩を作ったということではない。）

○以下の文章は「散結格」（結聯が對にならない格）と直接には關係せず、格を説明する『五十一格』の性格とも異なり、特に「諸格本因虚實動靜之法」以後は格と創作の關係に對する認識を語るものである。故に二次的な性格が顯著であると思われる。

二次的な注釋が附されていること、更に『五十一格』を繼承し發展させたと見られる「三氏杜詩注」が存在することから、この書は長期に渡って廣く尊重され、研究されていたものと考えられる。

六、『五十一格』の成書年代

六一、注釈パターンにおける趙次公注との異同

すでに述べたように、今日現存する最古の杜詩注解集は趙次公の注であるといわれる。次公、字は彥材、蜀の人、隆興年間（一一六三〜一一六四）隆州司法を擔當する。杜詩注や蘇軾の詩注を著したが、杜注の著作年代は紹興四〇（一一七〇）七年（一一三二〜一一四七）の間であるといわれる。⁽⁴⁸⁾『五十一格』を一三五九年以前の様々な杜詩注解と校勘した結果、趙次公杜詩注との接點が『諸將』（其三）において發見された。先ず兩者の注釋パターンの相違を明らかにするため、原詩及び兩注の全文を掲載する。（原詩は『五十一格』に基づく。）

洛陽宮殿化爲烽 洛陽の宮殿 化して烽と爲る

休道秦關百二重 道うを休めよ 秦關 百二重と（秦は朝鮮本では秦と作る）

滄海未全歸禹貢 滄海 未だ全くは禹貢に歸せず

薊門何處覓堯封 薊門 何れの處か 堯封を覓めん（虚は朝鮮本では處と作る）

朝廷衮職誰爭補 朝廷の衮職 誰が争い補わん

天下軍儲不自供 天下の軍儲 自ずからは供せず

稍喜臨邊王相國 稍や喜ぶ 邊に臨む王相國

肯銷金甲事春農 肯て金甲を銷して春農を事とするを

○『五十一格』の注釋

歇續格：再歇再續、錯綜成篇。（詩の内容から見た）盡きると續くの格：再び盡き、再び續く。錯綜して篇を成す。）

第一聯：休道二字有思致、有幹旋、⁽⁵¹⁾可見盜賊長驅、如入無人之境。觀此聯、則唐似之矣。是歇也。（「休道」二字、面白みあり、味わい深い。盜賊が長驅し、無人の境に入るが如き様が目に見える。この聯を見れば、唐がそれ（漢）に似ているのだ。これが盡きるである。）

第二聯：滄海、言山東。未全、則存者猶多。何處、則淪沒未復。觀此、則猶未亡。是續也。（「滄海」は山東をいう。「未全」とは則ち存するものが猶多いことをいう。「何處」とは則ち淪沒して未だ回復しないことをいう。この聯を見れば、則ち未だ滅亡していない（と分かる）。これが續進である。）

第三聯：上言股肱、下言岳牧。衮職誰補、則太平無期。軍儲不供、則職貢多缺。觀此、則無可恃者。⁽⁵²⁾是又歇也。（上句は信賴できる大臣のことを言い、下句は各地方の長官を言う。「衮職誰補」（三公の職務は誰が補うか）とは、何時太平の日が来るか分からないの意。「軍儲不供」（軍用糧秣が供給されず）とは、賦税や貢ぎものは多く缺けているの意。これを見れば、國政を任せられる者がいないことが分かる。これまた歇である。）

第四聯：縉紳所爲、則猶可恃、又續也。（縉紳の行うところから見れば、なお頼りになりそうだと言う。再び續である。）

○趙次公の注釋（前掲注48林の書、八三一頁）

第一聯：上句亦挨曹子建詩：「洛陽何寂寞、宮殿盡燒焚」。「化爲烽」、則謂舉烽燧於殿上也。「秦關百二」事、『前漢』、田肯賀高祖曰：「陛下治秦中。秦、形勝之國也、帶河阻山、縣隔千里、持戟百萬、秦得百二焉。」注曰、「百二、得百中之二、二萬人也。秦地險、固二萬人足當諸侯百萬人也。」今云「百二重」、則既百二、而又得百二也。舊注引張孟陽『劍閣銘』「秦得百二、併吞山河。」乃是使田肯事、是爲無祖矣。（上句はまた曹植の詩「洛陽何寂寞、宮殿盡燒焚」に由來する。「化爲烽」とは殿上で烽燧を擧げることという。「秦關百二」とは、『漢書』（本紀・卷一下・高帝紀第一下）に田肯は高祖を祝つて曰う：「陛下は秦地を治めています。秦は地形の險しい國で、山あり河あり、山河に千里も隔てられています。戟を持った兵士百萬に對しても、秦は百分の二だけで十分です。」とあり、その注に曰く、「百二とは、百分の二、二萬人の意。秦は地形が險しい、故に二萬人をもつて十分諸侯の百萬人に對抗できる」という。今（杜詩に）「百二重」というのは、既ち百二である上に、更にまた百二を得たとの意味である。舊注は張載『劍閣銘』の「秦は百が二を得、山河を併吞す」を引くが、張の文章も田肯の典故を使っている。舊注は根本を究めていない。）

第二聯：「滄海」、指言山東。「薊門」、指言河北。古詩云：「出自薊北門」也。「禹貢」、則尙書有此篇。「堯封」、則董仲舒云：「堯・舜在上、比屋可封」。「何處盡堯封」、則何處是堯可封之民。亦以言爲吐蕃所陷也。（「滄海」は山東を指して言う。「薊門」は河北を指して言う。古詩云く「出自薊北門」⁵⁴。「禹貢」は『尚書』にその名の篇がある。「堯封」については董仲舒が「堯・舜上にあり、家々には德行ありて封ずべし」と云う。「何處盡堯封」とはいったいどこに堯が封じるに足る有徳の民があらうかとの意味である。また吐蕃によって陷落したことをい

う。)

第三聯：上句舊本作「雖多預」、師民瞻本作「誰爭補」、是。詩曰：「衰職有闕、維仲山甫補之。」今不能然、公是以罪之也。下句則公亦歎其無如之何之辭、言郡國不修貢賦、須上求索而後供、非以其職而自供者也。(上句舊本「雖多預」に作る。師民瞻本は「誰爭補」と作り、これが正しい。『毛詩』(大雅・蕩之什・烝民)に「衰職に闕有らば、維れ仲山甫之を補ふ」というが、今日はそれができない。杜甫はこれを非難している。下句は杜甫がなすすべもなく嘆く言葉である。郡や諸侯の國はみずから地方の産物や租税を獻上せず、上に催促された後をはじめて供し、なすべきまりに従って自ら供するのではないことを言う。)

第四聯：「王相國」、舊注云：「王縉也」。『新書・本傳』不見其事。廣德二年、歲在甲辰、劉晏・李峴罷、王縉・杜鴻漸同平章事。至大曆十二年元載坐贓賄伏誅、貶王縉爲括州刺史、乃在公死七年之後、此見於『編年通載』、而『新書』王縉附兄王維傳止云爲尚書左丞。若以公此句爲指王縉、則縉自廣德二年同平章事之後、於大曆二年前、豈嘗出而臨邊乎。『新書』既脫略、無所考也。「臨邊」字、『文中子』云「折衝樽俎、不必臨邊」。「金甲」字、蔡文姬詩：「金甲耀日光」。(舊注では「王相國」を「王縉也」という。だが『新唐書・本傳』にはこの詩に描かれるようなことは見られない。廣德二年甲辰の歲(七六四)に、劉晏・李峴は辭職し、王縉・杜鴻漸は同平章事になった。大曆十二年(七七七)に至り、元載は收賄の罪で誅され、王縉は降格され括州の刺史となった。これは杜甫が亡くなってから七年後のことである。このことは『編年通載』に見られるが、『新唐書』王縉傳に附す兄・王維の傳には「尚書左丞」に爲ったとしか言わない。⁽⁵⁵⁾もし杜公のこの句が王縉を指すとすれば、縉が廣德二年(七六四)同平章事を擔當した後、大曆二年(七六七)までの間に、⁽⁵⁶⁾朝廷を出て邊境を治めていたのであろう。『新唐書』では省略されているので、考證することはできない。「臨邊」の語は、『文中子』に「樽俎で折衝すれば、邊に臨む必要はない」の句があり、「金甲」は、蔡文姬の詩に「金甲日光に耀く」⁽⁵⁷⁾の句がある。)

以上に基づき兩注釋の異同を表にしてみよう。(○は有、×は無、△は少ないことを示す。)

趙次公注	五十一格	出典 明記	典故 引用	史實 考證	舊注 引用	文字 校勘	全句 意譯	格の 説明	滄海Ⅱ 山東	王相國 Ⅱ王緒
○	×							×	○	○
○	×						△	○	○	×
○	×									
○	×									
○	×									
○	×									
○	×									
○	×									

表からも分かるように、經典釋文の方法は趙注では全面的に使用されている。杜詩は「往往一字緊切、必有來處(往往にして各一字が要であり、必ず由來するところがある)」(前掲注48の林著所載「趙次公自序」と述べる趙氏にとつて、これは當然の結果である。一方、『五十一格』には經典釋文の方法は見られず、詩意の説明の最後は必ず格名と關係付けて結ぶ。趙次公注にはすでにない詩格の特徴が明らかである。この違いは注釋方針や注解者個人の素質などによって生じたものかも知れないが、時代による差が大きいのではないか、つまり、『五十一格』は杜詩研究において、まだ經典釋文の方法が用いられていない時代に生まれたのではないだろうか。

杜詩研究の歴史は宋代における收集整理、集注、編年、分類の後に、劉辰翁(一二三二—一二九七)に至り「評點」(批評して要所や優れたところに點を付ける)という手法が新たに生まれたといわれている。⁽⁵⁸⁾しかし、『諸將』(其三)の劉注には「洙曰……」「趙曰……」と出典が明記され、それまでの杜詩注が數多く拔粹されている。⁽⁵⁹⁾また、元代になると律詩のみ収録し、山川、花鳥、紀行、懷古などに分類した杜詩注が流行し、中でも張性(一二三〇年頃)の『杜律演義』が最も代表的であるという。⁽⁶⁰⁾その注釋パターンは、出典を明記してはいないが、舊注の内容が詳細に引用されており、洙注・趙注以來の影響が顯著である。元代には聯單位のもの、一首全體を對象とするもの、いずれのタイプの詩格論も存在し、中には杜甫の詩の引用も見られる。しかし、全篇杜詩のみを對象に、詩格を論じた書は見られな

い。また元代の詩法書（廣義の『詩家一指』、『詩法源流』、『木天禁語』を代表とする。〈前掲注5小論C参照〉）には、句法や字法を題目ごとに簡潔に解説する詩格書部分と、長文のエッセイである詩話の部分が相半ばして共存している。それに對し、『五十一格』には、先に挙げた二次的注釋の第二の例を除き、詩話の要素は全く見られない。このような事實から『五十一格』の成書年代を考えれば、それは「趙注」以前、更に「洙注」以前のものではないかと考えられる。次は、上記の「王相國」「滄海」に關する注釋を通して上の假説を検證したい。

六―二、「王相國」の解釈の異同

第四聯の「王相國」について『五十一格』では「縉紳」、つまり高位高官の者、士大夫と解釋されている。これは現存する他の杜詩關係の書には全く見られない説である。一方、趙注では先ず舊説（宋代の杜詩集注に斷片的に載っている「洙注」）「王相國」王縉を掲げ、その後『新唐書』（二〇六〇年成書）を根據に綿密な考證を行い、最後に舊説に既出の典故『文中子』折衝樽俎不臨邊⁽⁶³⁾と「金甲」の語が見られる蔡文姬の詩句を加えた。この「王相國」王縉の説は定説として今日まで繼承されている。これに對し、『五十一格』が「王相國」縉紳⁽⁶⁴⁾としか述べないのは、趙氏のいう「舊注」がまだ存在しない時代の産物だからではないか。この點によっても『五十一格』の成書年代は「洙注」よりも更に古いのではないかと考えられる。

六―三、「滄海」山東の説

第二聯にある「滄海」について、趙注は「指言山東」、『五十一格』は「言山東」と述べ、兩注は一致する。宋代を中心とする杜詩集注の多くは、滄海の説明に「次公：滄海、指言山東」と擧げている⁽⁶⁴⁾。それでは兩注の間には何らかの關係があるのだろうか。この問題を考えるために、先ず杜詩の「山東」に對する趙次公の注釋を検討する。次に擧

げるのは杜詩における「山東」の全ての使用例である。⁽⁶⁵⁾

	詩句	作詩年代	趙次公注		
			太行山以東、河北	齊州	無注
一	『兵車行』「君不聞、漢家山東二百州、千村萬落生荊杞。」	七四二～五五	○		
二	『蘇端薛復筵簡薛華醉歌』「近來海內爲長句、汝與山東李白好。」	七五七			○
三	『洗兵馬』「中興諸將收山東、捷書夕報清書同。」	七五七	○		
四	『與嚴二歸奉禮別』「山東群盜散、闕下受降頻。」	七六三	○		
五	『送舍弟穎赴齊州三首』其三「諸姑今海畔、兩弟亦山東。」	七六七		○	
六	『承聞河北諸道節度入朝歡喜口號絕句十二首』其八「灑漫山東一百州、削成如案抱青丘。」	七六七	○		
七	『往在一首』「安得自西極、申命空山東。」	七六七			○
八	『又上後園山脚』「昔我游山東、憶戲東岳陽」	七六七			○
九	『宿花石戍一首』「山東殘逆氣、吳楚守王度。」	七六九	○		

表の一「君不聞、漢家山東二百州、千村萬落生荊杞。」（聞きたまえ。わが漢家の山東二百餘州の地は、村という村、部落という部落が、ことごとく荒れ果ててしまったというではないか。）につき、趙氏は次のように注する。

A 山東者、太行山之東也。漢史所謂「山東出相」、杜牧謂「山東、王不得、不王」。昔言山東、即古之晉地、今之河北也。今言山東、則謂太山之東、乃古之齊地、今之京東路也。（山東とは、太行山の東である。『漢書』の言う「山東に宰相が出る」。杜牧（八〇三～八五二）の言う「山東は、王者がそれを得ていないため、平定されていない」の山東である。昔山東というのは即ち古の晉地、今の河北である。今（北宋）山東と言うのは、則ち泰山の東、つまり古の齊地、現在の京東路である。）（前掲注48林の書、二七頁）

また、表の六「瀟漫山東一百州、削成如案抱青丘。（百州もある廣大な山東は、案の^{つくえ}ように削られ（完全に平定され）、青丘（青州の千乘、今の山東省廣饒縣）を取り込む。」）については、Aにある『漢書』と杜牧の引用を繰り返した後、次のようにいう。

B：今日以昔之山東專謂之河北、昔之齊地專謂之山東、故學者惑焉。（今日（北宋）、昔の山東を専ら河北と呼び、昔の齊地を専ら山東と呼ぶ。故に學ぶ者が困惑する。）（前掲注48林の書、九一二頁）

AとBによれば、杜詩の山東は太行山の東、つまり河北であるが、趙次公の時代にはそのような山東概念はすでに一般的ではなく、「齊地」つまり泰山の東が専ら山東と呼ばれていたことが分かる。それでは「滄海、指言山東」の山東は何を意味するのだろうか。

趙注では、「滄海、指言山東」に續き「薊門、指言河北」という注がある。律詩の原則で考えれば、「滄海」と「薊門」は對をなしているので、關連性を持っていると同時に、同じものではないはずである。そこで、趙氏の山東說と合わせてその意味を解讀すれば、「滄海は山東——泰山の東を指し、薊門は河北——太行山の東を指す」となる。趙次公以後、「滄海＝山東」の説は定論となった。「滄海」に對しては「青州」「淄青」「河北、河南東部」などの注が付せられるが、いずれも山東の範圍を出ない。⁽⁶⁷⁾しかし「滄海」は本當に「泰山の東」を意味するのだろうか。

次に杜詩の「滄海」に對する趙次公の注釋を檢討する。杜詩における「滄海」の全ての使用例を以下に挙げる。

「滄海」使用例16のうち、趙注の中で海（渤海、東海、南海を含む）と解されたものは13例、陸地と解されたものは3例あるが、「滄海＝山東」を除く2例は、青海（西海、現在の青海湖周⁽⁶⁸⁾邊）と解釋されている。『秦州雜詩二十首』其六の「防河赴滄海、奉詔發金微。（黃河を守るため滄海に赴き、詔令を受け金微から派遣された。）」について、趙氏は『防河赴滄海』、則吐蕃雖旋請和、而出入不常、則河又不可不防矣。滄海、豈指青海耶？考之地理、洮州之北河州、河州渡河則鄯州、鄯州之北則青海也。『黃河を守るため滄海に赴き』とは、吐蕃はしばしば講和を申し出るが、態度

	詩句	作詩年代	趙次公注				
			海			陸地	
			海	渤海	東海	南海	青海 山東
一	『臨邑舍弟書至苦雨黃河泛溢堤防之患薄領所憂因寄此詩用寬其意』「聞道黃河坂、遙連滄海高。」	七四一	○				
二	『與李十二白同尋范十隱居』「不願論簪笏、悠悠滄海情。」	七四四	○	○			
三	『上韋左相二十韻』「豫樟深出地、滄海闊無津。」	七五五			○		
四	『喜晴』「漢陰有鹿門、滄海有靈查。」	七五六	○				
五	『送翰林張司馬南海勒碑 相國製文』「不知滄海上、天遣幾時回。」	七五八				○	
六	『桔柏渡』「西轅自茲異、東逝不可要。高通荊門路、闊會滄海潮。」	七五九	○				
七	『秦州雜詩二十首』其六「防河赴滄海、奉詔發金微。」	七五九				○	○
八	『秦州雜詩二十首』其一五「未暇泛滄海、悠悠兵馬間。」	七五九				○	
九	『傷春五首』其四「蕭關迷北上、滄海欲東巡。」	七六四			○		
十	『八哀詩』其八「故右僕射相國張公九齡」「千秋滄海南、名繫朱鳥影。」	七六五	○			○	
一一	『諸將』其三「滄海未全歸禹貢、薊門何處盡堯封。」	七六六					○
一二	『不離西閨』其二「滄海先迎日、銀河倒列星。」	七六六			○		
一三	『鷗』「幾羣滄海上、清影日蕭蕭。」	七六六	○				
一四	『寄薛三郎中據一首』「青草洞庭湖、東浮滄海漚。」	七六七	○		○		
一五	『岳麓山道林二寺行一首』「地靈步步雪三草、僧寶人人滄海珠。」	七六九	○				
一六	『暮秋枉裴道州手札率爾遣興寄近呈蘇澳侍御一首』「盈把那須滄海珠、入懷本倚崑山玉。」	七六九	○				

が一定しないので、黄河を（防御線として）守備しなくてはならないということである。滄海は青海を指しているのではない。その地理關係を考えると、洮州（今の甘肅省臨潭市）⁽⁶⁹⁾の北は河州（今の甘肅省和政縣の北西）、河州から黄河を渡れば鄯州（今の青海省西寧市）、鄯州の北は則ち青海である」と解釋する。（前掲注48林の書三一頁）⁽⁷¹⁾

それでは、『諸將』（其三）の「滄海」は「山東」すなわち泰山の東という解でよいだろうか。『諸將』（其三）が書かれた大曆元年（七六六）は、安史の亂は平定されたが（七六三）、安祿山の本據地であった薊門（今の北京・天津あたり）を始めとする河北の藩鎮割據と、青海を本據地とする吐蕃の侵入が國政上の最大の問題であった。特に、吐蕃軍による伊州陷落（七六二）、隴關陷落（七六三）、同年十月の長安入京、涼州陷落（七六四）、甘州・肅州陷落（七六六）と、その猛威は増す一方であった。⁽⁷²⁾これと比べて、泰山以東の淄青鎮はまだ大きな混亂はなく、領土の問題もなかった。⁽⁷³⁾「滄海」が一方の政情不安の地河北を指す「薊門」と對偶關係にあることからすれば、『諸將』（其三）の滄海は山東ではなく青海を意味するのではないだろうか。

この問題に關連して注目されるのは、趙注の第二聯の最後に、唐突な一文が現れることである。「亦以言爲吐蕃所陷也（また吐蕃によって陷落したことをもいう）」とあるが、滄海・薊門を山東・河北として解釋する以上、この一聯を吐蕃と結び付ける理由はない。趙次公はここでも「滄海＝青海」という可能性を意識して、この一文を付け加えたのではないだろうか。では、何故趙次公は青海を選ばなかったのか。筆者は『五十一格』山東說の影響に答えを求めたい。

『五十一格』の中で固有名詞に注釋が付されたのはこの「滄海＝山東」のみであり、極めて特殊な現象である。何故滄海に注が必要だったのだろうか。「薊門」と對になっている以上、「滄海」も固有名詞であり、「未全歸禹貢（完全には天子に貢納する地となっていない）」という以上、滄海は海ではなく陸地である。前掲注68に挙げた北海郡・東海郡・南海郡・西海郡の例から、海周邊の土地を「海」と呼ぶことは中國では珍しくない。⁽⁷⁴⁾では「滄海」はどの地

方の海と考えるのが一般的だろうか。曹操『步出夏門行』に「東臨碣石、以觀滄海（東のかた碣石に臨み、滄海を觀る）」という詩句があるように、山東半島を圍む渤海と東海は古くから滄海とも呼ばれていた。史實の考證を行わないう『五十一格』は、この最も一般的な用法に基づき「滄海＝山東」と注を付したのではないか。そして、趙次公はこの説を繼承したのではないかと推測される。

それでは、趙次公は『五十一格』のような詩格書を参照した可能性はあるだろうか。趙次公は『句法義例』（散逸）を著したことがあり、『諸將五首』（其五）の注「此又以人名對處所格（これ又人名と場所名を對にする格である）」のように、「格」を以て杜詩を注解する箇所も見られる。彼は詩格をも熟知しており、『五十一格』の内容について直接或は間接的に知っていた。そして、『諸將』（其三）「滄海」の注釋において『五十一格』の説に従ったと推測したい。以上のような注釋パターンの相違、及び注釋内容の類似點に基づき、『五十一格』は趙注より古く、趙注によって繼承された可能性があると考ええる。

七、結語

紹興中（一一三一～六二）改定の『祕書省續編到四庫闕書目』⁽⁷⁸⁾には『杜氏十二律詩格一卷』が、鄭樵（一一〇四～六二）『通志』⁽⁷⁹⁾には『杜氏詩律詩格一卷』が記録されている。いずれも散逸しているので、内容の考證が不可能だが、書名から見れば、『五十一格』と關連があるのではないかと思われる。⁽⁸⁰⁾よって、少なくとも南宋初期までにこの系統の書物がすでに存在したことが推測される。一方、胡應麟（一五五〇～一六〇二）『詩藪』には『杜氏詩格一卷』唐人詩話」という記述がある。⁽⁸¹⁾「唐人詩話」という記述は重要な情報ではあるが、これには慎重に對應すべきだろう。それは「三氏杜詩注」の著者に對する「杜甫の門人」説が明末までにすでに廣く知られており、強い影響力があったからである。⁽⁸²⁾つまり、『杜氏詩格』が『五十一格』或は「三氏杜詩注」と關係する書物であれば、「唐人詩話」というコメ

ントは書誌學的な考證によるものではなく、「杜甫の門人」説という「常識」に基づいて付けられた可能性が排除できないからである。

唐代の杜詩研究の情況については、胡可先「唐人書中所見杜甫詩輯目」⁽⁸³⁾があり、顧問『唐詩類選』（散逸、宋人詩話より引用）、韋莊『又玄集』、皎然『詩式』、元稹『元氏長慶集』、白居易『白氏長慶集』など十二種の書物から、六七條（全詩の引用は15條。數字は筆者の統計による）の杜詩の引用が発見されている。また、筆者が『文苑英華』（九八六年）を調査した結果、杜詩は74首含まれるが、『五十一格』に含まれる作は『送韓十四歸江東省親』、『江村』、『宣政殿退朝晚出左掖』の三首のみであった。⁽⁸⁴⁾更に、本論三一二で述べた唐五代の詩格書に杜詩は五例しかないという調査結果と合わせれば、杜詩七律のみからなる『五十一格』の成立は、唐代においてはあり得ないのではないかと思われる。

本論は朝鮮本『木天禁語』（一五五五年）に含まれる『杜陵詩律五十一格』に基づき、その特徴及び著作年代を検討してきた。その結果明らかになったのは以下の諸點である。

第一、全詩採録、杜甫の七言律のみ、特に夔州詩の重視といった新しい選詩法、そして拗體の提起、起承轉結的な視座、といった特徴から、本書は詩格書でありながら唐五代のものではない。第二、第一の起承轉結的な視座を根據に、起承轉結理論の起源に關する楊仲弘説、及び新説である宋代經義説に疑問が生じ、その源は『五十一格』が代表する杜詩の詩格的研究に由來するのではないかと考えられる。第三、李淑『詩苑類格』に基づく范德機の律詩篇法十三格の考察から、全詩を對象に、句と句、聯と聯の關係を考察する手法はすでに『詩苑類格』に存在したと推測する。この手法は『五十一格』でも廣く用いられていることから、その成書年代は『詩苑類格』の刊行（一〇三九年）と前後する時代であると考えられる。第四、詩の順序、特に連章組詩の分離現象によれば、本書は王洙の杜詩集の影響を受けていない。よって全ての杜詩研究の源は王洙本にあるという従來の説が否定される。第五、二次的な注釋の發見

と『五十一格』を繼承した「三氏杜詩注」の存在に基づき、本書は長期に渡って廣く尊重され研究されたことが明らかである。第六、趙次公注との比較により、『五十一格』は杜詩に對する經典釋文的な注釋が確立する以前に生まれたもので、趙注、洙注よりも古く、趙注によって繼承された可能性がある。よって、『五十一格』は王洙本とは別系統の、現存する最古の、そして後代に大きな影響を與えた杜詩研究書であると考ええる。

注

(1) 鄭慶篤・焦裕銀・張忠綱・馮建國『杜集書目提要』(齊魯書社、一九八九年九月、「前言」三頁参照。)

(2) 洪業『杜詩引得序』、『杜詩引得』(哈佛燕京學社、一九四〇年九月、二頁)、及び前掲注1の書の三頁参照。

(3) 「三氏杜詩注」は筆者による假題である。この書の題目は次のように様々に表記されている。①題目なし(五山版『詩法源流』、明の史潛『新刊名賢詩法』)、②『詩格』(懷悅『詩法源流』)、③『詩源撮要註』(周履靖『夷門廣牘』第四冊)、④『詩法源流・卷之下・律詩』(王用章『詩法源流』)、⑤『杜陵詩律』(清の范懋柱『天一閣書目』集部)⑥『律詩法』(吳景旭『歷代詩話』)、⑦『杜律心法』(顧龍振『詩學指南』)、⑧『詩解』(張健『元代詩法校考』北京大學出版社、二〇〇一年九月)。この一群のテキストの呼稱として、その性格を明らかにするため、更に新たな書名として誤解されないため、「三氏杜詩注」を用いた。

(4) 小論A『詩法源流』偽書說新考——五山版『詩法源流』と朝鮮本『木天禁語』に基づく考察——『日本中國學會報』第五十一集、一九九九年十月、一一五—一二〇頁、或いはB『詩法源流』偽書說新考——根據五山版『詩法源流』和朝鮮本『木天禁語』(『文史』二〇〇〇年二月第二集、總第五一集、中華書局、二二五—二三三頁)参照。

(5) 筆者が見た何れの刊本にも「内篇」という語が付せられている。このことについて『四庫全書總目提要』卷一百九十七では「是編開卷標内篇二字、然別無外篇、不知何故獨名爲内。」と疑問を呈するが、張健は「是因楊成本『詩法』卷一爲『木天禁語』標内篇、卷二爲『詩家一指』標外篇。」(前掲注3⑧張の書一四一頁)と述べ、「内篇」という語の來源は、一四八〇年刊行された楊成『詩法』にあると解釋する。しかし、一三八九年に刊行された趙謙『學范』にはすでに『木天禁語』の書名とその一部の引用が見えており、筆者は十四世紀、すでに朝鮮本のような廣義の『木天禁語』が成立したと考える(小論C「對《二十四詩品》懷悅說・虞集說的再考察——根據朝鮮本《詩家一指》、《木天禁語》及日本江戸版《詩法源流》」『唐研究』第四卷、一九九八年十二月、北京大學出版社)一〇五—一〇六頁参照。朝鮮本『木天禁語』には「内篇」

の語はあるが、「外篇」に當たるものではなく、「内篇」という標記は楊成本に基づくものではないと考えられる。「内篇」については今後の課題とする。

(6) 『木天禁語』(内篇) 以下は一つの書に含まれる幾つかの文章だが、引用文との混同を避けるため、ここでは『』を以て表す。又、『附詩法源流・傳與礪述范德機先生意』の部分は、懷悅編『詩法源流』などでは、『詩法正論』という題目になっている。

(7) 『木天禁語』など詩論書の狹義性・廣義性について詳細は、前掲注5小論C(二〇一〜一〇三、一二八頁、或いは小論D『二十四詩品』の著者と成書年代に關する考察―朝鮮本『詩家一指』と『木天禁語』に基づいて、『東京大學中國語中國文學研究室紀要』第一號、東京大學文學部、一九九八年四月、七〜九頁)を参照。ただし、その中で『五十一格』が『三氏杜詩注』と同一視されている點は訂正されるべきである。また『千頃堂書目』卷三十二、『欽定續文獻通考』卷一九八、『欽定續通志』卷一六三、『四庫全書總目』卷八十七、『浙江通志』卷二五二などにも、『木天禁語』は書名として記録されているが、狹義・廣義どちらのものかは定かではない。

(8) 張著は「茲以日本天保十一年翻刻朝鮮尹春年本爲底本、校以謝天瑞『詩法大成』本」と明記しているが(前掲注3⑧の一七頁)、『南勢歐陽闡』という記述は見られない。しかし、張著の一四一頁、一二二頁では南勢本の餘白に特有の注釋と後人の書き込みが引用されているところから、その底本は即ち南勢本であることが推測される。但し、張氏は校勘する際に、南勢本を「尹春年本」と稱し、その餘白にある後人の書き込みを「日本翻刻本校作…」としている(一二二頁)點は不正確であり、訂正されるべきであると思われる。(後の注52参照)

(9) 「變中之變」は大文字ではなく、格名(5)「首尾互答格」の後に續く雙行小字注に出てくる。「右瞿塘、曲江、二地相去如千里、秋氣於風烟中自相通。此二句作成一句、謂之十四字句。律詩以仄起爲正體、平起爲變體。此詩平起而又兩句串作一句、是謂變中之變。(右の詩の「瞿塘」と「曲江」は、相隔たること千里の如しといえども、風烟中において、秋氣は自ずから相通ず。此の二句は合わせて一句を形成し、十四字句と謂うべきである。律詩は仄起を以て正體となし、平起を變體と爲す。此の詩は平起である上に、又、兩句をつらぬいて一句を作す。ゆえに「變中之變」と謂う。)」この文面から「變中之變」は「秋興」(其六)⑤に基づき、獨立した格名と考えられる。「變中之變」と51の「扇對」を格名とすることで、初めて書名の「五十一格」と一致する。(下注10参照)

(10) 「扇對」の項は全て雙行小字で書かれているが、筆者は「扇對」を獨立した格名として立てた。(前掲注9参照)その内容は次のようである。
(筆者注：『詠懷古迹』(其二)④「恨望千秋一洒泪、蕭條異代不同時」の「千」字對「一」、異「字對「同」、謂之「扇對」。如『將赴成都草堂途中有作先寄嚴鄭公五首』其三)「書籤藥裏封蛛網、野店山橋送馬蹄」、『撥悶』「長年三老遙憐汝、振袖開頭捷有神」、『季夏送鄉弟韶陪黃門從叔朝謁』「捨舟策馬論兵地、拖玉腰金報主身」、『曲江對酒』「楊花細逐桃花落、黃鳥時兼白鳥飛」皆此法也。

- (11) 清姚鼐『五七言今體詩鈔序目』(『今體鈔』臺灣中華書局、一九七一年)「杜公七律、含天地之元氣、包古今之正變。」
- (12) 馬茂元「思飄雲物動 律中鬼神驚——談杜甫和唐代的七言律詩」(『杜甫研究論文集』第三輯、一九六三年九月、中華書局、一三〇頁)「在文藝形式的運用上,最能見出杜詩獨創性的,應該是他的律詩,特別是七言律詩。」
- (13) 屈守元「從幾個小統計看杜甫夔州詩創作的一些問題」(『草堂』一九八四年第二期)參照。このような統計は、裴斐「杜律學隅」(同誌、一九八三年第二期)、劉知漸・熊篤「如何理解杜甫的『詩律』」(同誌、一九八三年第一期)、馬承五「試論杜甫七律組詩的連章法」(同誌、一九八五年第二期)にも見られるが、數字は多少異なる。このうち屈論は統計に基づき杜詩を検討することを目的とするもので、その數字を採用する。
- (14) 黃庭堅「與王觀復書三首」其二「山谷集」卷十九「書三十五首」、「但熟觀杜子美到夔州後古律詩、便得句法簡易、而大巧出焉。」(文淵閣『四庫全書』電子版〈香港迪志文化出版有限公司、上海人民出版社〉に基づく)。
- (15) 胡震亨『唐音癸籤』卷十「少陵七律與諸家異者有五:篇製多、一也。一題數首不盡、二也。好作拗體、三也。詩料無所不入、四也。好自標榜、即以詩入詩、五也」、仇兆鰲『杜詩詳註』卷十四(七律「十二月一日三首」其三)「杜詩、凡數章承接、必有相連章法」
- (16) 前掲注13屈守元の論文一六頁。
- (17) 許總「艱難詩萬首 夔州至今名——杜甫夔州詩評價之我見」(『草堂』一九八五年第二期、五〇頁)
- (18) 張伯偉『全唐五代詩格校考』(陝西人民教育出版社、一九九六年七月、一頁)參照。
- (19) 本論の唐五代詩格書の引用は前掲注18の書に基づく。(二二三—一七六頁)
- (20) 前掲注18の書(一五〇頁)より。掲載詩はそれぞれ「古詩十九首」其一六と江淹「江文通雜體詩三十首・休上人別怨」である。
- (21) 前掲注18の書(三〇四頁、二五頁)、注3⑧の張の書「前言」(二二三—二四頁)參照。
- (22) 『續金鍼詩格』は前掲注18の書五〇八頁參照。『續金鍼詩格』の「扇對」を引用したのは以下の書である。胡仔「漁隱叢話」前集卷九「杜少陵四」「山谷云…」、曾慥『類說』卷五十一、張鑑「仕學規範」卷三十七、嚴羽『滄浪集』卷一「詩體」、魏慶之『詩人玉屑』卷二「詩評體」、蔡夢弼『草堂詩話』卷上、蔡正孫『詩林廣記』卷八。(前掲注14の『四庫全書』に基づく)
- (23) 前掲注18張の書三六四頁參照。
- (24) 拗體・失粘の提起は次の書に見ることが出来る。「拗句格」(王楙「野客叢書」卷十九による胡仔「荅溪漁隱叢話」の引用)。「拗字」(范曄文『對床夜語』卷二「五言律詩」)、方回「瀛奎律髓」卷二十五「拗字類」)。「失粘」(胡仔「漁隱叢話」前集卷七「杜少陵二」による『荅溪漁隱』

の引用、魏慶之『詩人玉屑』卷二「詩評」（第三）「江左體」、蔡夢弼『草堂詩話』卷上による『苕溪』の引用、蔡正孫『詩林廣記』卷二。前掲注14『四庫全書』に基づく。

(25) 『五十一格』の中には起・承・轉・結に關わる言及は多數見られるが、その中に「承」の語はこの箇所以外一つも用いられていない。傳本の過程で「承」は「乘」と誤ったとも考えられるが、今後更に検討を續けたい。

(26) この注は「聯珠格」と關係なく、「前輩謂」「工部多用此法」という語り方は他の注釋と異なっていることから、後述する二次的な注釋の一つである可能性が考えられる。

(27) 前掲注18の書三三三頁參照。

(28) 蔣寅「起承轉合：機械結構論的消長——兼論八股文法與詩學的關係」（『文學遺產』一九九八年第三期）。六五頁「從現存文獻看，作為詩學問題的起承轉合之說，最早見於元人詩法，具體說就是楊載『詩法家數』與傅若金『詩法正論』」。六八頁「目前我尚未在宋元有關經義的文獻中發見起承轉合的直接表述」。六九頁「基本結論：起承轉合之說，即使不是從經義作法中直接移植過來，也是在其理論框架中產生的」。

(29) 前掲注4小論A或いはB參照。因みに、張健は前掲注3⑧の書（四五く四八頁）で、五山版『詩法源流』の楊仲弘序の日付「時至治壬戌初元四月既望」に見える「初元」の二文字に注目し、「初元」（一三三二年）は「至治壬戌」（一三三二年）と矛盾するのを理由に、楊仲弘序は偽書である可能性が極めて高いと指摘する。しかし、逆にこのような明らかなミスがあるからこそ、偽造者の手によるものではないとの推測もあり得るだろう。たとえ偽書であったとしても、この序文と「三氏杜詩注」がともに元代に出版されていることから、元代において、「三氏杜詩注」の特徴とも言える起承轉結の論は楊仲弘、或いは元代の發明ではなく、元以前すでにあり、楊仲弘はそれを繼承した、という認識が一般的であったことが推測される。もしそうであれば、起承轉結の楊仲弘起源説は後の時代に新たに作られた説になるということになる。因みに、「三氏杜詩注」（張健の書では題目は「詩解」と作る）と『五十一格』との關係について、張氏は同じ詩格書の二つ系統というが、兩者の關係については考察していない。（這種詩格著作可以分爲兩個大的系統。一個是『杜陵詩律五十一格』系統，另一個是五山版『詩法源流』系統。」前掲注3⑧の書の四二頁。）

(30) 『文苑詩格』は古くから白居易作と傳えられてきたが、『直齋書錄解題』がその説に疑問を呈した。現在は一般に「舊題」を付けて呼んでいる。「聯環文藻」の全文は次の通りである。「爲詩不論大小，須聯環文藻，得隔句相解。古詩云『擾擾羈遊子，營營市井人。懷金近從利，負劍遠辭親。』此第四句解第一句、第三句解二句。今詩云『青山碾爲塵，白日無閒人。自古推高車，爭利入西秦。』此第三句解第一句、第四句解第二句。」（前掲注18の書三三九頁）

(31) 前掲注14『四庫全書』集部九。蜂腰體の模範例として次の詩が掲げられている。「下第唯空囊、如何住帝鄉。杏園啼百舌、誰醉在花傍。淚落故山遠、病來春草長。知音逢豈易、孤棹負三湘。」(賈島『下第』)

(32) 「仔書作於高宗時、所錄北宋人語爲多。慶之書作於度宗時、所錄南宋人語較備。二書相輔、宋人論詩槩亦畧具矣。」(前掲注14『四庫全書總目』卷一百九十五・集部四十八・詩文評類一)

(33) 前掲注3⑧の張の書一三八〜一四〇頁、一四三頁參照。

(34) 『玉海』卷五十四(元王厚孫校、元刊・明嘉靖修)。しかし、晁公武(約一一〇五〜一一八〇)『郡齋讀書志』卷四下、馬端臨(宋末元初)『文獻通考』卷二百四十九では、出版年代は「寶元三年」となっている。

(35) 范德機は『詩苑類格』の篇法について「止有六格」といい、『玉海』の「八篇常格、兩篇變格」といい、格數を述べない記述とはずれがある。なお『詩苑類格』に關する記載は以下のものがあるが、『篇法』に關する部分は見られない。①曾慥(紹興一一三一〜一一六二)初年前後在世)『類說』卷五十一(梁の沈約)「八病」、(隋)「文中子論詩」、(唐上官儀)「六對」、(唐)「孫翌論詩」、(皎然論詩)、「三偷」、「白樂天詩」。②王應麟『困學紀聞』卷十八「同文出於寶滔妻所作」。(前掲注14『四庫全書』に基づく)

(36) 十三格に掲げられた格名(十三個)と七律詩例(十二首)は以下の通りである。一字血脉『鵲巢』崔珣、二字貫串『江村』杜子美、數字連序・中斷在內『中丞弟得除江陵併起居衛尚書大夫人』(前人)、三字棟梁『南遷』柳子厚、鈎鎖連環『草』據集中見此詩(不詳)、雙拋『汴門用兵後』吳融、單拋『秋興八首』(其七)杜少陵、內剝『玉臺觀』前人、外剝『錦瑟』李商隱、前散『送戴鍊師歸隱』(不詳)、後散・二字貫串在內『感興寄友』(前掲注14『四庫全書』集部五・別集類五『句曲外史集』卷中、題は『寄京師吳養浩修撰薛玄卿法師兼懷張仲舉右謁因寄』、著者は元の張雨と作る)、順流而下『贈張鍊師』劉禹錫。このうち「中斷」は「數字連序」と同じ詩を對象に解説されており、合わせて十三の格となる。また、最初の『鵲巢』では、朝鮮本、林羅山本と南勢本共に、圖式に用いる○が一句八つとなっている。林羅山本は更に二番目の『江村』においても同様。

(37) 『氷川詩式』(隆慶五年(一五七二)序刊本。内閣文庫藏)には前述した范德機の解題「唐人李淑有『詩苑』一書……が引用されており(卷六)、范氏が擴充した十三格の名が見られ、説明が付されている(卷七)。王昌會『詩話類編』の引用は卷一、體格より。(臺灣廣文書局影印萬曆丙辰年(一六一六)本、一九七三年、四八頁)

(38) 今日見られる『宋本杜工部集』(二十卷、王洙寶元二年記、王琪嘉祐四年後記、裴煜補遺、清毛辰識、張元濟一九五七年跋。上海商務印書館据上海圖書館藏宋刻本原書影印)について、黒川洋一氏が張元濟の跋文に基づいて行った考證によれば、この書物は「南宋初年の二種の刻本

をつないで一本としたものである。：一本は、卷一より卷九までの部分と、卷十五より卷二十及び補遺までの部分で、南宋初年に翻刻せられた王洙本であり、他の一本は、卷十より卷十四に至る部分で、同じく南宋初年に刊刻せられた吳若本である。」という。（黒川洋一「宋本杜工部集」の流傳と吳若本の問題について『吉川博士退休記念・中國文學論集』三九二頁。筑摩書店、一九六八年）。「秋興八首」「諸將五首」「詠懷古跡五首」は共に同書の卷十五（王洙本の部分）に含まれ、連章組詩となっている。

- (39) 徐居仁輯、黃鶴補注『集千家註分類杜工部詩』（二十五卷、五山版一三七二年刊、國會圖書館藏）では、門類によって組詩が二部分に分けられた例が見られる。例えば卷三の懷古門に「詠懷古跡三首」、卷六の陵廟門に「詠懷古跡二首」が収められるのがそれである。しかし、その題注にはそれぞれ「同作五首、二首見陵廟門」、「同作五首、三首見懷古門」とあり、二首と三首それぞれの掲載順序も王洙本と一致することから、王洙本を踏まえていることが推測される。また、前掲注37『永川詩式』（卷七）では、「秋興」「諸將」「詠懷古跡」はバラバラに配置され、全首が揃っていないが、登場順に、「第一」「第二」という番號が付されている。

- (40) 金聖嘆『唱經堂杜詩解』卷之三『杜詩叢刊』第二輯、大通書局、一九六四年影印宣統二年順德鄧氏排印本、三五七頁、葉嘉瑩『杜甫秋興八首集說』（上海古典出版社、一九八八年、五一頁）

- (41) 文字の校勘からも、『五十一格』は王洙本系統の影響を受けていないという推測を裏付ける結果が得られた。①『諸將』（其四）「良一臣」（前が『五十一格』後が他刊本。下同）、②『秋興』（其八）「樓」樓、③「夜」「遙遙」遙應、④『詠懷古跡』「古迹」古跡、⑤『送韓十四歸江東省觀』「歸江東」江東」（『三氏杜詩注』のみに一致。下同）、⑥「狂夫」「淨」靜、⑦「宣政殿退朝晚出左掖」「榜」勝・「佩」珮、⑧『小至』「管」瑄。校勘に用いた刊本は、④五山版『詩法源流』、⑤『宋本杜工部集』、⑥趙次公『新定杜工部古詩近體詩先後并解』明鈔殘本（詳見下注48A）、⑦魯魯編・蔡夢弼箋『杜工部草堂詩箋』（光緒二年刊本）、⑧郭知遠集『新刊校定集注杜詩』（中華書局一九八二年、影印瞿氏鐵琴銅劍樓藏曾鳳刊本）、⑨魯魯編年并注・王十朋集注『王狀元集百家注編年杜陵詩史』（吉川幸次郎編輯『杜詩又義』第一・二冊、影印民國二年貴池劉氏玉海堂景宋刊本、中文出版社、一九七六年）、⑩錢謙益『杜工部集注』（詳見下注44）、⑪朱鶴齡『杜工部詩集』（詳見下注42）である。

- (42) 朱鶴齡『杜工部詩集』十三卷（吉川幸次郎編輯『杜詩又義』第四・六冊、中文出版社、一九七六年、影印景康熙九年刊本）

- (43) 清の浦起龍『讀杜心解』（卷四之二「七律」、清雍正三年刊）、松原朗「杜甫『詠懷古跡』詩考——古跡の意味するものについて——」（『人文科學年報』專修大學人文科學研究所、一九九一年第二號、一六〇頁）、長谷部剛『宋本杜工部集』をめぐる諸問題——附「錢注杜詩」と吳若本について——（『中國詩文論叢』第十六集、一九九七年十月、九八—一〇〇頁參照）の諸論が、朱鶴齡の注記に言及する。

(44) 錢謙益『杜工部集注』(新文豐出版公司影印康熙六年季振宜靜思堂刊本、一九七九年。)

(45) 浦起龍は『詠懷古跡』(其一)について「此『詠懷』也。與『古跡』無涉、與下四首亦無關會」と注する。(前掲注43浦起龍著より)

(46) 「三氏杜詩注」が含まれる五山版の底本となった『詩法源流』の初版は一二三八年前後に刊行されたと筆者は推定する。(前掲注4、Aの一二頁、或いはBの二二二頁参照。『秋興八首』の章法研究に關しては、葉嘉瑩著(前掲注40、三一頁)の中で最古のものとして次の二つが挙げられている。明胡震亨『杜詩通』引く奚祿詒の批評「前四首言肅・代二朝、後四首則追天寶」、及び王嗣夷(一五二五—一六四八)『杜臆』の「秋興八首」、以第一首起興、而後七首俱發中懷、或承上、或起下、或互相發、或遙相應、總是一篇文字、拆去一章不得、單選一章不得」である。

(47) 原文は「此」に作るが、東京都立大學佐藤進教授のご教示により、「比」に改めた。

(48) 現存する趙次公の杜詩注には、A『新定杜工部古詩近體詩先後并解』明鈔殘卷(北京圖書館藏)とB『新定杜工部古詩近體詩先後解』清鈔殘卷(成都杜甫草堂藏)の二種があるが、Bは筆者未見。A、Bをもとに、後代の諸注から趙次公注を集め、復原を試みたのが林繼中『杜詩趙次公先後解輯校』(上海古籍出版社、一九九四年十二月)である。趙次公の生年、その杜詩注の成書年代等については本書の「前言」三頁参照。筆者は主に林の書を参照したが、Aを用いて文字の校訂を行った。

(49) 『五十一格』は「三五九年に出版された『三氏杜詩注』(五山版『詩法源流』に含まれる)に繼承されたことから、その成書年代は一三五九年前であるとするのが筆者の見解である。

(50) 『五十一格』には歌續格(14)以下、問答格・開合格・期必格・抑揚格・多少格・今昔格(15、16、17、18、19、20)という格が續く。このうち多少格(19『諸將』其四)の下には「再多多少、似歌續而異」とあり、一聯ごとに、「盜賊多也」「職貢少也」「榮貴者多也」「效功者少也」という注が付せられている。「多」という状態と「少」という状態を交互に描くことで、一篇を構成しているものが「多少格」ということが出来る。歌續格より今昔格までは全て同様で、對照的狀態が交互に現れることに注目しているものと思われる。よってこの篇を唐朝の命運の「歌(盡きる)」「續(存續する)」を錯綜して描いたものとし、その構成法を歌續格と呼んでいるものと考ええる。

(51) 筆者が見た刊本と抄本はいずれも「幹旋」(つかさどる、とり行う)と作るが、張健著(前掲注3⑧の書一二二頁)では、本文は「幹旋」に作る。前後の文脈から「幹旋」(意味深く味わいがあるさま)の間違いではないかと考え訂正する。

(52) 『諸將』(其三)の原詩と注釋について、林羅山本は本文に掲載した朝鮮本と同じ。南勢本では朝鮮本の「岳牧」「恃」を、「也牧」「恃」と作り、またページの下部の餘白に明らかに刊行後のものと見られる「州」という書き込みがある。この二箇所について、張健著(前掲注3⑧の

一二二頁)の本文では「州牧」「侍」と作り、注五では「州、尹春年本原作“也”、日本翻刻本校作“州”字、茲據改。『詩法大成』本作“岳”。」注六では「侍、尹春年本作“侍”、茲據『詩法大成』本改。」と説明する。よって張氏は南勢本を「尹春年本」と稱し、餘白にある後人の書き込みを「日本翻刻本」のものとしていると考えられる。(前掲注8参照)

(53) 嚴可均校輯『全上古三代秦漢三國六朝文』(卷八十五「全晉文」、中華書局、一九五八年二月、一九五一頁)では「山河」は「諸侯」と作る。

(54) 古詩「出自薊北門」については、宋李昉『太平御覽』卷八百、四夷部二十一・北狄二に「古詩曰『出自薊北門、遙望胡地桑』」という句がある。同書卷九百五十五・木部四には「曹植艷歌曰」として「出自薊北門、遙望胡地桑」という同じ句が見える。また宋の陳景沂『全芳備祖後集』卷二十二・桑(麻附)・事實祖・五言古詩には、「梁簡文帝」としての「出自薊北門、遙望胡地桑」があり、宋の郭茂倩『樂府詩集』卷六十一・雜曲歌辭には作者不詳の「出自薊北門、結客少年場」が見える。(前掲注14『四庫全書』による。)

(55) 趙次公の言う『編年通載』(宋の章衡撰、筆者未見)所載「廣德二年…大曆十二年…」の記述は、『新唐書』では「表・卷六十二・表第二宰相中」に見られる。また、同じく「尚書左丞」に関する記述は同前書卷二百二、列傳第一百二十七、(文藝中)王維傳に見られる。『新唐書』は(臺灣)中央研究院計算中心『瀚典』の新校本系二十五史に基づく。)

(56) 「大曆二年前」は『諸將』が書かれた大曆元年を意味するのではないかと思われる。

(57) 遼欽立輯校『先秦漢魏晉南北朝詩』『漢詩』卷七、(中華書局、一九八三年九月、一九九頁)蔡琰『悲憤詩』にも「金甲耀日光」の句が見える。

(58) 「繼宋代收集整理杜詩、集注杜詩、編年杜詩、分類杜詩之後、自劉辰翁始、又興起評點杜詩一派。」(前掲注1『杜集書目提要』四二頁)

(59) 須溪先生劉會孟批點『集千家註批點杜工部詩集』二〇卷(影印天理圖書館藏雲鶴會文堂戊申(一三〇八年)刊本。影印本の書名は『杜工部詩集』である。六二頁参照。)

(60) 周采泉『杜集書錄』による。(上海古籍出版社、一九八六年二月、二八四頁参照。)

(61) 張性『杜律演義』後集(臺灣大通書局『杜詩叢刊』第一輯、影印嘉靖一六年汝南王齋刊本。一一一頁参照。)

(62) 前掲注48林の書「前言」による(六頁)。また、「洙注」について、周采泉は王洙のものではなく、鄧忠君(元祐、一〇八六〜九三頃)、或いは孫洙(元豐、一〇七八〜八五頃)のものであると指摘する。(前掲注60の二三頁、六三八頁参照。)

(63) 「王相國」に関する「洙注」は「王狀元集百家注編年杜陵詩史」(前掲注41〇七七九頁)では「洙曰、王縉也。『文中子』折衝樽俎不臨邊。」と作る。文字の異同はあるが他の刊本もほぼ同じである。(考證に用いた刊本は前掲注41の〇『新刊校定集注杜詩』卷三〇、『分門集註杜工部詩』宋闕名集註(臺灣大通書局『杜詩叢刊』第一輯影印上海涵芬樓借南海潘氏藏宋刊本、一一〇三頁参照。)

- (64) 以下の刊本において、「滄海」の解釋は全て趙注の山東説が引用されている。①『新刊校定集注杜詩』②『王狀元集百家注編年杜陵詩史』①と②は詳見注41の◆◆、③『分門集註杜工部詩』（詳見前掲注63）、④『集千家註分類杜工部詩』徐居仁編次、黃鶴補註。（影印元皇慶元年建安餘氏勤有堂刊、元末葉氏廣勤堂印本。臺灣大通書局『杜詩叢刊』第一輯第十、十二冊、四二九頁）、⑤『集千家註批點杜工部詩集』（詳見前掲注59）
- (65) 杜詩の檢索は東吳中文研究所『寒泉』の『全唐詩全文檢索資料庫回應』に基づく。以下同。
- (66) 『漢書』と『杜牧』の出典はそれぞれ前掲注55『瀚典』の『漢書』列傳、卷六十九趙充國辛慶忌傳第三十九「秦、漢已來、山東出相、山西出將、『新唐書』卷二一〇、列傳第三三五藩鎮魏博「杜牧至以『山東、王不得、不王；霸不得、不霸；賊得之、故天下不安。』」による。
- (67) 「滄海、指禹貢青州之域」（仇兆鰲『杜少陵集詳註』卷十六）；滄海「指淄青等處」（浦起龍『讀杜心解』卷四之二）；『滄海』指唐河北、河南兩道東部地區（馮至編選、浦江清・吳天五合註『杜甫詩選』（作家出版社、一九五六年。二〇七頁）
- (68) 王昱・聰喆『青海簡史』（青海人民出版社、一九九二年、一三頁）によれば、西海という地名の始まりは前漢平帝元始四年（四）、王莽が四海一統を創り上げるため、北海郡・東海郡・南海郡にちなみ、龍夷（今の青海省海晏县）に西海郡を設置したことによる。（前掲注55『瀚典』の『後漢書』列傳・卷八十七・西羌傳第七十七・羌無弋爰劍「至王莽輔政、欲耀威德、以懷遠爲名、乃令譚諷旨諸羌、使共獻西海之地。初開以爲郡、築五縣、邊海亭燧相望焉。」）また、『諸將』創作の前にも、西海が設置された記録がある。『瀚典』の『新唐書』志第三十地理四、隴右道「西海。下。寶應元年置。」
- (69) 譚其驤『中國歷史地圖集』第五冊（中國地圖出版社、一九八二年一〇月）「隋・唐・五代」、六一—六二參照。
- (70) 前掲注69『中國歷史地圖集』によれば、北ではなく西である。
- (71) 『秦州雜詩二十首』其五「未暇泛滄海、悠悠兵馬間。」（表の八）の滄海について、趙次公は「前篇之『防河杜滄海』、則滄海專指西海。」と説明する（前掲注48林の書、三二七頁）。一方、明の邵傳『杜律集解』（「杜律五言集解」卷之二。日本元祿九年（一六九六）刊本、臺灣大通書局『杜詩叢刊』第三輯、八五頁）には「言我未暇乘桴浮海而悠悠於兵馬之間」とあり、鈴木虎雄・黒川洋一『杜詩』（第三冊、岩波書店、一九六五年、七六頁）には「泛滄海、ひろい海にうかぶ、孔子がいかだに乗って海にうかぶの意を用いる。『論語』（公治長）に見える。」とある。兩書とも、この詩の「泛滄海」は孔子の「乘桴浮於海」を踏まえていることを指摘している。筆者は邵傳・鈴木・黒川の説に賛成する。
- (72) 王小甫『唐、吐蕃、大食政治關係史』（北京大學出版社、一九九二年二月、二九九頁參照。）
- (73) 清の浦起龍『讀杜心解』卷四之二は、「滄海未全歸禹貢」に對し「指淄青等處（淄青節度使の管轄地域（今日の山東省濟南市以東の地域）を

- 指す」と述べ、「薊門何處盡堯封」に「指盧龍等處（范陽節度使の管轄地域（幽州、今日の河北省北部及び熱河南部）を指す）」と注を付す。
- また、『諸將』（其三）全體に對し「此爲制河北者告也。藩鎮之禍、河北最甚；而其禍皆成於代宗之初。時成德則李寶臣、魏博則田承嗣、相衛則薛嵩、盧龍則李懷仙、淄青則李正己。各治兵完城、自署將吏、不供貢賦、其可憂更切於吐蕃・回紇。」と述べている。こゝで言及されている地域のうち、李正己の淄青は山東にあり、ほかは河北道に屬する。浦氏の説は滄海＝山東の説を繼承し、更に充實したことは明らかであり、これ以後今日までこの詩の注解において「滄海＝淄青」という説が多く見られるようになった。（清の楊倫『杜詩鏡銓』卷一三、上海古籍出版社排印本、一九八〇年七月、六四一頁；梁運昌『杜園說杜』嘉慶二十四年成書、書目文獻出版社、一九九五年影印、八二〇頁；近人馮至編選、浦江清・吳天五合註『杜甫詩選』作家出版社、一九五六年、二〇七頁；山東大學中文系『杜甫詩選』人民文學出版社、一九八〇年、二七二頁；陳胎燉『杜詩評傳』上海古籍出版社、一九八八年五月、一〇三五頁參照）。しかし、浦氏の解釋は、『諸將』が書かれた七六六年の政治狀況と一致するのだろうか。淄青においては、李正己に始まり、四代（李納、李師古、李師道）に渡って節度使を世襲し、河北の割據勢力と五十年に渡って肩を並べた、というのには有名な逸話である（李正己盜有青・鄆十二州、傳襲四世、垂五十年。前掲注55『瀚典』の『舊唐書』卷一百六十二、列傳第一百一十二、曹華）。しかし、李正己が前の淄青節度使侯希逸に代わり、頭領として擁立されたのは七六五年の秋である（永泰元年（七六五）：秋七月辛卯朔、淄青節度使侯希逸爲副將李懷玉（李正己）所逐。制以鄭王邕爲平盧、淄青節度大使、令懷玉權知留後事。」（同前書、本紀・卷十一、本紀第十一・代宗李豫）。つまり『諸將』が書かれた七六六年は、李正己が淄青節度使となった翌年であり、その時点で淄青（山東）がすでに河北と肩を並べられるほどの勢力になっていたことを示す記述は見當たらぬ。
- (74) この記述は前掲注48のA明鈔殘卷にも見られる。
- (75) 二十五史と全唐詩を調べたところ「滄海」を陸地の意で用いるもので、次のような例がみつかった。前掲注55『瀚典』の『二十五史』と前掲注65の『全唐詩』に基づく。

出典	滄海の意味
一 『新校本北史』列傳・卷七十六、列傳第六十四・周法尚：「遼東之役、以舟師指朝鮮道。會楊玄感反、與宇文述、來護等破之。以功進授右光祿大夫。時齊郡人王薄、孟讓等爲盜、保長白山、法尚頻擊破之。明年臨滄海、在軍遇疾卒。」	朝鮮道
二 李嘉祐『送杜士瞻楚州觀省』「雲深滄海暮、柳暗白田春。」	楚州（今の江蘇省内）

- (76) 『句法義例』は『閑夜』の注「次公『句法義例』中論之詳矣」(前掲注48林の書、八五八頁)として言及されている。
- (77) 前掲注48林の書、八三四頁。
- (78) 葉德輝考證『秘書省續編到四庫闕書目』卷一「文史類」、(許逸民・常國振『中國歷代書目叢刊』影印觀古堂書目叢刊本、現代出版社、一九八七年十一月、第一輯、上、三〇〇頁)
- (79) 『通志』卷七十、「藝文略・詩評」。(中華書局出版影印萬有文庫十通本、一九八七年一月、志八二八)
- (80) 張伯偉著(前掲注18、五五二頁)では『少陵詩格』との關連において、「杜氏詩律詩格一卷」、「杜氏十二律詩格一卷」、「杜氏詩格一卷」が擧げられる。また、張健著(前掲注3⑧四七頁)では『詩解』(本論の「三氏杜詩注」)について以上の書名が言及される。
- (81) 『詩藪』雜編卷二、「遺逸中・載籍」(上海古籍出版社、一九五八年十月新第一版、一九七九年十一月新第一版、二七二頁。)
- (82) 現存の「三氏杜詩注」(前掲注3参照)には、この書を杜甫の門人の著作であると明言する楊仲弘の序が附せられている。
- (83) 『杜甫研究學刊』一九九〇年第一期
- (84) 『文苑英華』(臺灣華文書局、影印明隆慶刊本全卷、一九六五年)に基づく。

三	崔峒『送候山人赴會稽』「雲深滄海暮、猶向白雪看。」	會稽(今の浙江省紹興市近く)
四	白居易『初到郡齋寄錢湖州李蘇州』「俱來滄海郡、半作白頭翁。謾道風煙接、何曾笑語同。吏稀秋稅畢、客散晚庭空。霽後當樓月、潮來滿座風。書溪殊冷僻、茂苑太繁雄。唯此錢唐郡、閒忙恰得中。」	錢唐郡(今の浙江省杭州市)
五	權龍襄『初到滄州呈州官』「遙看滄海城、楊柳鬱青青。」	滄州(今の河北省滄州市東南)